

「国立大学法人会計基準」及び  
「国立大学法人会計基準注解」  
報 告 書  
(改訂案)

平成15年3月5日  
(平成〇〇年〇〇月〇〇日 改訂)

国立大学法人会計基準等検討会議

## 目 次

「国立大学法人会計基準」及び「国立大学法人会計基準注解」報告書について	i
固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準の設定及び国立大学法人会計基準 の改訂について	iv

### 「国立大学法人会計基準」及び「国立大学法人会計基準注解」報告書

第1章 一般原則	1
第2章 概念	4
第3章 認識及び測定	12
第4章 財務諸表の体系	19
第5章 貸借対照表	21
第6章 損益計算書	29
第7章 キャッシュ・フロー計算書	31
第8章 利益の処分又は損失の処理に関する書類	36
第9章 国立大学法人等業務実施コスト計算書	38
第10章 附属明細書及び注記	40
第11章 国立大学法人等固有の会計処理	<del>42</del>
<b><u>43</u></b>	
第12章 連結財務諸表	<del>49</del>
<b><u>50</u></b>	
(別添)	
「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準」及び	
「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準注解」	<del>60</del>
<b><u>61</u></b>	

# 「国立大学法人会計基準」及び「国立大学法人会計基準注解」報告書について

平成15年 3月 5日

国立大学法人会計基準等検討会議

## 1. 「国立大学法人会計基準」及び「国立大学法人会計基準注解」の検討の経緯

国立大学の法人化については、平成12年7月に発足した「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」において、大学改革の一環として、①個性豊かな大学づくりと国際競争力ある教育研究の展開、②国民や社会への説明責任の重視と競争原理の導入、③経営責任の明確化による機動的・戦略的な大学運営の実現、の3つの視点から検討が行われ、「新しい「国立大学法人」像について」として平成14年3月26日に最終報告（以下「報告」という。）がなされたところである。

報告においては、「国立大学法人」に適用する会計基準について、『独立行政法人全般に適用する会計基準については、既に「独立行政法人会計基準」が策定されているが、これを参考としつつ、大学の特性を踏まえた会計基準を検討する。』とされている。

本検討会議では、報告を受け、平成14年4月3日の初会合から平成15年3月5日まで計8回の会合において、大学の特性を踏まえた国立大学法人会計基準等について検討を行ってきた。平成14年8月22日には、それまでの検討状況を、中間報告という形でとりまとめたが、同報告の公表後、①特殊法人を母体とする独立行政法人の設置を前提とした「独立行政法人会計基準」の改訂（平成15年3月3日）、②国立大学法人法案等関連法案の確定（平成15年2月28日閣議決定）等が行われた。本検討会議においては、これらを考慮しつつ引き続き検討を行い、このたび、その成果を「国立大学法人会計基準」及び「国立大学法人会計基準注解」（以下「基準及び注解」という。）報告書として取りまとめるに至ったものである。

なお、中間報告の取りまとめの時点において、結論の出ていなかったPFIについては、現時点においても、具体的な会計基準上の取扱いは確定していない。一方、国立大学等の法人化は、平成16年4月に予定されているため、「基準及び注解」については、PFIの取扱いを含め、法人への移行までの間の各局面での更なる検討の結果や状況の変化等を踏まえ、追加、修正等が行われることもあり得るものである。

## 2. 独立行政法人会計基準と企業会計原則

本検討会議において、その検討の基礎とした「独立行政法人会計基準」は、独立行政法人に適用となる会計基準であり、『独立行政法人の会計は原則として企業会計原則によるものとする』（独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）第37条）と規定されているところである。しかしながら、独立行政法人は、制度の前提や財政構造等が営利企業とは異なるため、企業会計原則を独立行政法人にそのままの形で適用すると、伝えるべき会計情報が伝達されず、あるいはゆがめられた形で提供さ

れかねないことから、「独立行政法人会計基準」においては企業会計原則に一定の修正が行われている。

その主な観点は、

- ①独立行政法人は公共的な性格を有し、利益の獲得を目的とせず、独立採算制を前提としないこと
- ②独立行政法人は政策の実施主体であり、政策の企画立案の主体としての国の密接不可分の関係にあることから独立行政法人独自の判断では意思決定が完結し得ない場合が存すること
- ③独立行政法人には、毎事業年度における損益計算上の利益（剰余金）の獲得を目的として出資する資本主を制度上予定しないこと
- ④独立行政法人に対する動機付けの要請と財政上の観点の調整を図る必要があることである。

なお、前述のとおり、今後設立が予定されている独立行政法人においては多種多様な業務が実施されることとなること等に配慮し、全ての独立行政法人の会計処理に必要な会計基準を整備する必要があるとの観点から、本年3月「独立行政法人会計基準」の改訂が行われたところである。

### 3. 国立大学の特性

国立大学は、公私立大学とともに、今日まで我が国の学術研究と研究者等の人材育成の中核を担ってきたほか、地域の教育、文化、産業の基盤を支え、学生の進学機会を提供する等の重要な役割を果たしてきた。法人化後においても、「国民に支えられ、最終的に国が責任を果たすべき大学」（報告P. 4）として各国立大学毎に期待される使命や機能の明確化とその確実な実現が従来以上に強く求められているところである。

このような状況の下、国立大学法人に適用される会計基準等の策定に当たっては、①主たる業務内容が教育・研究であること、②学生納付金や附属病院収入等の固有かつ多額の収入を有すること、③同種の法人が多数設立されることから、国立大学法人間における一定の統一的取扱いが必要とされること、等の他の独立行政法人との相違点が適切に考慮されるべきと考えられる。

これらを踏まえ、本検討会議においては、「独立行政法人会計基準」を参考としつつ、主として以下の諸点に関し国立大学の特性に即した取扱いを検討した。

- ・運営費交付金等の収益化の進行基準
- ・教育・研究の基礎となる資産の取扱い
- ・授業料の負債計上
- ・共通するセグメント情報の開示区分の取扱い
- ・たな卸資産等の評価方法の取扱い等

また、独立行政法人会計基準の改訂については、「基準及び注解」に基本的にその変更点を反映させたが、国立大学法人の特性に鑑み、区分経理に係る記述等の国立大学法人について明らかに適用されない箇所については削除する等の変更を行って

る。

#### 4. 大学共同利用機関法人の取り扱い

大学共同利用機関は、学術研究の発展に伴い、特定の大学に附置しない大学の共同利用の機関として設置されてきたが、その活動の実態は、大学における諸活動と極めて強い類似性を有している。制度上も、人事面、会計面を含め、国立大学と同様の位置付けがなされている。

機関法人を設置することとされている。中間報告は、国立大学法人のみを直接の対象としていたが、本検討会議では、このような状況を踏まえて大学共同利用機関についても検討を行い、「基準及び注解」を大学共同利用機関法人についても適用することが適当であるとの結論を得た。

また、今般の国立大学法人法案においては、国立大学法人と並び4つの大学共同利用機関法人を設置することとされている。中間報告は、国立大学法人のみを直接の対象としていたが、本検討会議では、このような状況を踏まえて大学共同利用機関についても検討を行い、「基準及び注解」を大学共同利用機関法人についても適用することが適当であるとの結論を得た。

#### 5. 「基準及び注解」の性格

「基準及び注解」は、国立大学法人の会計に関する認識、測定、表示及び開示の基準を定めるものであって、国立大学法人がその会計を処理するに当たって従わなければならないものであるとともに、会計監査人が国立大学法人の財務諸表等の監査をする場合において依拠しなければならないものである。

したがって、国立大学法人は他に合理的な理由がない限り、この「基準及び注解」に定めるところにより会計処理を行わなければならないが、そこに定められていない事項については、合理的な理由がない限り、一般に公正妥当と認められている会計原則に従うこととなる。

なお、「基準及び注解」は、現時点で想定しうる国立大学法人の全ての会計取引及び事象に対応可能な会計基準であると考えるが、近年、公的な主体に係る会計基準についての研究が活発に行われるようになってきているほか、企業会計についても、会計基準の国際的調和を図るべく議論されているところである。

本検討会議は、このような動向を踏まえ、国民に対する情報開示及び国立大学法人の業績の適正な評価に資する観点から、「基準及び注解」の今後のさらなる充実改善を期待するものである。

# 固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準の設定及び 国立大学法人会計基準の改訂について

平成17年12月22日  
国立大学法人会計基準等検討会議

## 1. 会計基準の設定及び改訂の経緯

企業会計では、平成14年8月9日に企業会計審議会より公表された「固定資産の減損に係る会計基準の設定に関する意見書」において、「固定資産の減損に係る会計基準」が設定されるとともに、平成17年4月1日以後開始する事業年度から実施されるよう措置されることが適当であるとされた。

独立行政法人の会計は「原則として企業会計原則によるものとする」（独立行政法人通則法第37条）としつつ、「公共的な性格を有し、利益の獲得を目的とせず、独立採算制を前提としない等の独立行政法人の特殊性を考慮して必要な修正を加える」（「中央省庁等改革の推進に関する方針」平成11年4月27日中央省庁等改革推進本部決定）こととされていることから、独立行政法人の固定資産の減損に係る会計基準が検討され、『「固定資産の減損に係る独立行政法人会計基準」及び「固定資産の減損に係る独立行政法人会計基準注解」』（平成17年6月29日）（以下「独法減損基準及び注解」という。）が公表された。これを受けて、国立大学法人及び大学共同利用機関法人（以下「国立大学法人等」という。）が教育研究を主たる業務としているなどの特性を踏まえ、国立大学法人会計基準等検討会議（以下「検討会議」という。）において固定資産の減損に係る会計基準の検討を行った。

検討会議は、平成17年10月5日から同年11月22日まで合計3回の会合を開催し検討を重ね、「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準」及び「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準注解」（以下「減損基準及び注解」という。）を取りまとめ、また、これを受け「国立大学法人会計基準」及び「国立大学法人会計基準注解」（以下「基準及び注解」という。）の改訂を行ったものである。

## 2. 国立大学法人等の固定資産の減損に関する基本的考え方

### (1) 減損会計基準の整備の目的

検討会議では、国立大学法人等に対して固定資産の減損に係る会計基準を適用するにあたり、まず、独立行政法人における議論を踏まえて、その目的について議論を行った。企業会計における「固定資産の減損に係る会計基準」では、収益性の低下等により投資額の回収が見込めなくなった固定資産について、その帳簿価額を回収可能価額まで減額し、損失を将来に繰り延べないために行われる会計処理であるとされている。しかしながら、独立行政法人と同様に、公共的な性格を有し、利益の獲得を目的とはしない国立大学法人等について、固定資産への投資額の回収可能性によって減損を認識する企業会計の目的をそのまま適用することは合理的ではな

いと考える。

この点について、国立大学法人等はその業務の実施に関して負託された経済資源に関する財務情報を負託主体である国民に対して開示する責任を負うものであり、また、国立大学法人等により作成される財務報告は、その利用者である国民その他の利害関係者に対して利用目的に適合した有用な内容を提供するものでなければならぬことに鑑みれば、国立大学法人等の固定資産について減損会計を適用する目的は以下の諸点にあるものと認識する。

第一は、貸借対照表に計上される固定資産の過大な帳簿価額を減額することである。国立大学法人等の財政状態を明らかにするという国立大学法人等の貸借対照表の作成目的に鑑みれば、固定資産の帳簿価額が著しく過大となった場合には、これを適正な価額まで減額する必要があると認識する。

第二は、国立大学法人等が適切な業務遂行を行わなかった結果生じた減損損失を損益計算書に計上することにより、国立大学法人等の業績の適正評価に資することである。国立大学法人会計においては、業務の運営状況を明らかにするために損益計算が行われることから、国立大学法人等の業績を適正に評価する観点から損益計算に含めることが合理的である減損損失については、損益計算に含める必要があると認識する。

第三は、固定資産の減損に係る会計基準の適用によって、国立大学法人等の固定資産の有効利用を促進することである。固定資産に減損又はその兆候が生じたことを明らかにすることにより、国立大学法人等に対し、その有効利用を促すことが期待されるものと認識する。

検討会議においては、このような目的に適合した会計基準を設定する必要があるとの認識で一致した。

## (2) 減損の定義について

我が国における固定資産の減損処理については、企業会計において「固定資産の減損に係る会計基準」が適用されたばかりであるが、検討会議では、「独法減損基準及び注解」を参考にして検討を進めた。

減損処理の目的は、帳簿価額が著しく過大となった場合にこれを修正することにある。国立大学法人等の資産については、通常、市場原理に基づいたキャッシュ・フローの獲得が想定されないことから、どのような基準に基づいて帳簿価額の適否を判断すべきかが問題となる。

まず、固定資産のサービス提供能力に着目して、固定資産の減損を認識・測定することについて検討を行った。この点について、減損会計が業務に着目したものではなく、資産に着目したものであることから、固定資産のサービス提供能力とは、固定資産を使ってどのような業務が行えるかではなく、固定資産についてどの程度の使用が想定されているか、すなわち、固定資産をどの程度使用する予定であるか、と考えることが適当である。そして、固定資産について現在期待される使用の程度が固定資産の取得時に想定された使用の程度に著しく満たなくなった場合には、当

該資産の帳簿価額は過大であると認められることから、減損を認識することとした。

次に、資産は売却等によって収入を得られるという経済的便益があり、この側面から減損の認識・測定について検討を行った。この点については、取得原価主義の下、固定資産の市場価格が著しく下落し、その回復が見込めない場合には、これを早期に帳簿価額に反映させることが、国立大学法人等の財政状態を明らかにするという減損会計の目的や国民経済的観点からの資産の含み損の先送り防止という要請に合致するものと考えられる。また、市場価格が存在する固定資産については、その資産が一般的に提供しうる将来にわたる経済的便益を現在価値に割り引いたものが市場価格に表象されていると考えることもできる。このことから、固定資産の将来の経済的便益が著しく減少した場合についても、減損を認識することとした。

以上により、固定資産の減損とは、固定資産に現在期待されるサービス提供能力が当該資産の取得時に想定されたサービス提供能力に比べ著しく減少し将来にわたりその回復が見込めない状態又は固定資産の将来の経済的便益が著しく減少した状態をいうものと考えられる。

検討会議では、以上のような基本的考え方に立ち、「減損基準及び注解」の設定を行うこととした。

### 3. 「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準」の主な内容

「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準」では、まず、国立大学法人等の固定資産の減損に関する基本的考え方を明示するため、当該基準の目的及び減損の定義を規定することとした。

次に、当該基準の適用対象となる固定資産を、その性格及び重要性の観点から限定した。

また、対象資産すべてについて減損が生じているかどうかの判断を行うことが、実務上過大な負担となるおそれがあることから、固定資産に減損が生じている可能性を示す事象（減損の兆候）がある場合には、当該資産について減損を認識するかどうかの判断を行うこととした。

減損の認識を行うかどうかの判断は、固定資産の全部又は一部について使用が想定されているかどうか等により判断することとした。

そして、減損を認識すべきであると判定された固定資産については、その帳簿価額を回収可能サービス価額（正味売却価額と使用価値相当額のいずれか高い額）まで減額するとともに、当該減損が、国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行わなかったことにより生じたものである場合には、減損損失として当期の臨時損失とすることとし、中期計画等で想定した業務運営を行ったにもかかわらず生じたものであるときは、損益計算には含めないこととした。

また、利害関係者である国民等が国立大学法人等の財務諸表の理解をより深められるよう、減損が認識された固定資産に関し、当該資産の概要、認識するに至った経緯、回収可能サービス価額の算定方法等の事項について、注記することとした。更に、減損の



兆候が認められたにもかかわらず減損を認識するには至らなかった資産についても、国立大学法人等の評価に資するとの観点や資産の有効利用を促すとの観点から、当該資産及び減損の兆候の概要、減損を認識しなかった根拠等の事項について、注記することとした。

#### 4. 「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準」及び改訂後の「国立大学法人会計基準」の性格と取扱い

「減損基準及び注解」は、「基準及び注解」の基本構造の下での固定資産の減損に係る会計上の取扱いを定めたものであり、「基準及び注解」の一部を構成するものであるが、固定資産の取得から処分までのライフサイクル全般に関わる会計処理の基準であり、また、主に固定資産のサービス提供能力に着目してその会計処理を規定していること等から、減損に係る会計基準を体系的に示すことが適切と考えられるため、「基準及び注解」の別添として設定することとした。

また、「減損基準及び注解」及び改訂後の「基準及び注解」は、

- ① 国立大学法人等がその会計処理をするに当たって従わなければならない基準であるとともに、会計監査人が国立大学法人等の財務諸表等の監査をする場合において依拠しなければならない基準であって、国立大学法人等の会計に関する認識、測定、表示及び開示の基準を定めるものであること、
- ② 国立大学法人等における一般的かつ標準的な基準を示すものであり、国立大学法人等は他に合理的な理由がない限りこれらの基準の定めるところに従わなければならないが、そこに定められていない事項については、一般に公正妥当と認められる会計の基準に従うこととなること、

については、現行の「基準及び注解」と同様である。

なお、「減損基準及び注解」は、国立大学法人等が、学生納付金や附属病院収入等固有かつ多額の収入を有するものの、基本的には国からの財源措置に依存した業務運営を行っており、自己収入による投資額の回収が予定されていないことを念頭に設定したものである。したがって、固定資産からキャッシュ・フローが生み出され、独立採算型等の運営が予定されている業務は存在しないため、企業会計における固定資産の減損会計基準等を適用することが適切であるとは認められない。

#### 5. 今後の発展について

固定資産によって提供されるサービスの需要又は必要性の減少を把握するためには定量的な指標が必要となるが、現段階では国立大学法人等の業務の実績の評価に用いる指標は必ずしも定量的に明確なものとはなっていない。しかしながら、国立大学法人等の固定資産の利用状況に関する実績の評価に用いる指標を減損の兆候を判断する指標として使用することにより、その定量化を促進させていくべきであると考え、「減損基準及び注解」においては、固定資産が使用されている業務の実績の著しい低下を減損の兆候とすることとした。もっとも、中期目標や業務の実績の評価に用いる指標が抽象的・定性的である限りは、精度の高い判断を行うことは困難である。この

ことから、検討会議としては、文部科学大臣及び国立大学法人評価委員会に対し、「中央省庁等改革の推進に関する方針」及び「特殊法人等の廃止・民営化等及び独立行政法人の設立等にあたっての基本方針について」（平成14年10月18日特殊法人等改革推進本部決定）等の趣旨を踏まえ、中期目標、中期計画及び業務の実績の評価に用いる指標等を定量的かつ高水準のものとするとともに、今後、減損の兆候を判断する指標の定量化を進め、その精度を向上させることにより、資産の有効利用がなお一層図られることを期待するものである。

また、「減損基準及び注解」においては、国立大学法人等の業績の適正な評価に資するべく、減損の兆候が認められた固定資産について、減損の兆候の概要等の定性的な情報を注記することとしたが、国立大学法人等が保有する資産は国民共有の資産であり、有効利用が図られるべきものであることから、国立大学法人等が保有する固定資産について減損の兆候が認められる場合には、事業報告書においても記載を行うことにより、資産の有効利用を図るための検討に資することを期待する。

更に、近年、公的な主体の会計基準についてはその研究が活発に行われるようになっており、このような研究の動向等を踏まえ、国立大学法人会計に関する理論及び実務が今後より一層進展することを期待するとともに、「基準及び注解」について、今後とも充実改善が図られる必要があると認識する。

## 6. 適用時期

「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準」の規定の適用に当たっては、その設定及び改訂後速やかに適用されるべきであると考えことから、平成18事業年度から適用することが適切である。

# 「国立大学法人会計基準」及び「国立大学法人会計基準注解」報告書

## 第1章 一般原則

### 第1 真実性の原則

国立大学法人法（平成15年法律第112号）第2条に規定する国立大学法人及び大学共同利用機関法人（以下「国立大学法人等」という。）の会計は、国立大学法人等の財政状態及び運営状況に関して、真実な報告を提供するものでなければならない。（注1）

#### <注1> 真実性の原則について

- 1 国立大学法人等は教育研究に係る国の業務の実施に関して負託された経済資源に関する情報を負託主体である国民に開示する責任を負っており、説明責任の観点から、その財政状態及び運営状況を明らかにし、適切に情報開示を行うことが要請される。
- 2 国立大学法人等の業務運営については、その自律性及び自発性の発揮の観点から、国による事前統制を極力排除し、事後チェックに重点を置くこととされているが、適切に事後チェックを行うためには、業績評価が適正に行われなければならない。
- 3 このような説明責任の観点及び業績の適正評価の観点から、国立大学法人等の会計は、その財政状態及び運営状況に関して、真実な報告を提供するものでなければならない。

### 第2 正規の簿記の原則

- 1 国立大学法人等の会計は、国立大学法人等の財政状態及び運営状況に関するすべての取引及び事象について、複式簿記により体系的に記録し、正確な会計帳簿を作成しなければならない。（注2）
- 2 会計帳簿は、国立大学法人等の財政状態及び運営状況に関するすべての取引及び事象について、網羅的かつ検証可能な形で作成されなければならない。
- 3 国立大学法人等の財務諸表は、正確な会計帳簿に基づき作成し、相互に整合性を有するものでなければならない。（注3）

#### <注2> 複式簿記について

国立大学法人等においては、その財政状態及び運営状況に関するすべての取引及び事象について捕捉しうる合理的な会計処理及び記録の仕組みとして、複式簿記を導入するものとする。

#### <注3> 国立大学法人等業務実施コスト計算書の整合性について

- 1 国立大学法人等業務実施コスト計算書は、国立大学法人等の財務諸表を構成する書類の一つであり、基本的には正確な会計帳簿に基づき作成されるべきものである。
- 2 しかし、国立大学法人等業務実施コスト計算書には、その性格上一定の仮定計算に基

づく機会費用を含むことから、会計帳簿によらないで作成される部分が存することに留意する必要がある。その場合には、当該部分の作成根拠等を注記等により開示しなければならない。

### 第3 明瞭性の原則

国立大学法人等の会計は、財務諸表によって、国民その他の利害関係者に対し必要な会計情報を明瞭に表示し、国立大学法人等の状況に関する判断を誤らせないようにしなければならない。（注4）

#### <注4> 明瞭性の原則について

- 1 国民の需要に応じた教育研究を実施するために創設された国立大学法人等は、その教育研究のために負託された経済資源に関する会計情報を負託主体である国民を始めとする利害関係者に対し報告する責任を負っている。
- 2 国民その他の利害関係者にわかりやすい形で適切に情報開示するため、国立大学法人等の財務諸表は明瞭に表示されなければならない。

### 第4 重要性の原則

- 1 国立大学法人等の会計は、国民その他の利害関係者の国立大学法人等の状況に関する判断を誤らせないようにするため、取引及び事象の金額的側面及び質的側面の両面からの重要性を勘案して、適切な記録、計算及び表示を行わなければならない。
- 2 質的側面の考慮においては、国立大学法人等の会計の見地からの判断に加え、国立大学法人等の公共的性格に基づく判断も加味して行わなければならない。
- 3 重要性の乏しいものについては、本来の方法によらないで他の簡便な方法によることも正規の簿記の原則及び明瞭性の原則に従った処理として認められる。（注5）

#### <注5> 重要性の原則について

- 1 公共的な性格を有する国立大学法人等の会計は、国立大学法人会計基準に定めるところに従った会計処理及び表示が求められるものである。
- 2 ただし、国立大学法人等の会計が目的とするところは、国立大学法人等の財政状態及び運営状況を明らかにし、国民その他の利害関係者の判断を誤らせないようにすることにあることから、重要性の乏しいものについては、本来の会計処理によらないで合理的な範囲で他の簡便な方法によることも、正規の簿記の原則に従った処理として認められる。

一方で、国立大学法人等は、多数の法人が同種の業務を行うため、当該法人間における会計情報の比較可能性の確保を強く要請されることから、一定の事項については個々に判断するのではなく統一的な取扱いをする必要があることに留意する必要がある。

- 3 重要性の原則は、財務諸表の表示に関しても適用され、本来の財務諸表の表示方法によらないで合理的な範囲で他の簡便な方法によることも、明瞭性の原則に従った表示として認められる。

## 第5 資本取引・損益取引区分の原則

国立大学法人等の会計においては、資本取引と損益取引とを明瞭に区別しなければならない。（注6）

### <注6> 資本取引・損益取引区分の原則について

- 1 公共的な性格を有し、利益の獲得を目的とせず、独立採算制を前提としない国立大学法人等においては、第一に、経営成績ではなく運営状況を明らかにするために損益計算を行うこととなる。この観点からその運営状況を適正に示すため、国立大学法人等が中期計画に沿って通常の運営を行った場合、運営費交付金等の財源措置が行われる業務についてはその範囲において損益が均衡するように損益計算の仕組みが構築されることとなる。なお、国立大学法人等が行う業務には、その実施に収入が伴うものがあるが、こうした業務の中には、経営成績も加味した運営状況の開示が必要となるものもある。また、国との関係において、国立大学法人等の独自判断では意思決定が完結し得ない行為に起因する支出など国立大学法人等の業績を評価する手段としての損益計算に含めることが合理的ではない支出は、国立大学法人等の損益計算には含まれないものとする。
- 2 また、国立大学法人等においては、第二に、国立大学法人法第35条において準用する独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）（以下「準用通則法」という。）第44条にいう利益又は損失を確定するために損益計算を行うこととしている。
- 3 このように、国立大学法人等においては、財政状態及び運営状況を適正に示すという観点並びに準用通則法第44条にいう利益又は損失の確定を適切に行うという観点から、その会計において、資本取引と損益取引とを明瞭に区別しなければならない。

## 第6 継続性の原則

国立大学法人等の会計においては、その処理の原則及び手続を每期継続して適用し、みだりにこれを変更してはならない。（注7）

### <注7> 継続性の原則について

- 1 国立大学法人等は、その公共的な性格から適切に情報開示を行わなければならない、さらに、多数の法人が同種の業務を行うため、当該法人間における会計情報の比較可能性の確保を強く要請されることから、その会計処理の原則及び手続に関する選択性は原則として排除される。
- 2 しかしながら、一つの会計事実について二つ以上の会計処理の原則又は手続の選択適用が認められる場合は皆無とはいえない。そのような場合において、国立大学法人等が選択した会計処理の原則又は手続を継続して適用しないときは、同一の会計事実について異なる計算結果が算出されることになる。その結果、財務諸表の期間比較を困難ならしめ、国立大学法人等の財政状態及び運営状況に関する国民その他の利害関係者の判断を誤らしめるおそれがある。したがって、いったん採用した会計処理の原則及び手続は、正当な理由により変更を行う場合を除き、財務諸表を作成する各事業年度を通じて継続して適用しなければならない。
- 3 正当な理由によって、会計処理の原則又は手続に変更を加えたときは、これを財務諸

表に注記しなければならない。

- 4 財務諸表の表示方法について変更を加えたときは、これを財務諸表に注記しなければならない。

## 第7 保守主義の原則

- 1 国立大学法人等の会計は、予測される将来の危険に備えて慎重な判断に基づく会計処理を行わなければならない。
- 2 国立大学法人等の会計は、過度に保守的な会計処理を行うことにより、国立大学法人等の財政状態及び運営状況の真実な報告をゆがめてはならない。

## 第2章 概念

### 第8 資産の定義

- 1 国立大学法人等の資産とは、過去の取引又は事象の結果として国立大学法人等が支配する資源であって、それにより教育研究の実施能力又は将来の経済的便益が期待されるものをいう。
- 2 資産は、流動資産及び固定資産に分類される。
- 3 国立大学法人等においては、繰延資産を計上してはならない。（注8）

#### <注8> 繰延資産について

- 1 国立大学法人等においては、国からの財源措置が行われるが、その額は、国立大学法人等に負託された業務に係る支出額に対応する形で措置されることとなる。また、研究開発費等を資産として貸借対照表に計上することは適当でないとする「研究開発費等に係る会計基準」の考え方を勘案すると、国立大学法人等においては繰延資産を計上することは適当ではなく、支出した当該事業年度の費用として処理すべきものである。

~~2 国立大学法人等が事業資金等の調達のために債券を発行する場合で、債券の額面金額を下回る金額で発行した場合には、当該額面額を下回る金額は、長期前払費用としての性格を有することから債券発行差金の科目により資産として計上するものとする。~~

~~資産に計上した債券発行差金は、毎事業年度、債券の償還期間にわたり合理的な基準で計算した額を償却しなければならない。期限前に債券を償還した場合には、債券発行差金の未償却残高のうち、償還した債券に対応する部分を当該事業年度に償却しなければならない。~~

- ~~2~~ 債券発行に要した費用は、当該費用が発生した事業年度の費用として処理しなければならない。

### 第9 固定資産

固定資産は、有形固定資産、無形固定資産及び投資その他の資産に分類される。（注9）

<注9> 流動資産又は流動負債と固定資産又は固定負債とを区別する基準について

- 1 国立大学法人等の通常の業務活動により発生した受取手形、未収入金、前渡金、未払金、前受金等の債権及び債務は、流動資産又は流動負債に属するものとする。ただし、これらの債権のうち、破産債権、再生債権、更生債権及びこれに準ずる債権で、貸借対照表日の翌日から起算して一年以内（以下この章において「一年以内」という。）に回収されないことが明らかなものは、固定資産たる投資その他の資産に属するものとする。
- 2 借入金、差入保証金、当該国立大学法人等の通常の業務以外によって発生した未収入金、未払金等の債権及び債務で、一年以内に入金又は支払の期限が到来するものは、流動資産又は流動負債に属するものとし、入金又は支払の期限が一年を超えて到来するものは、投資その他の資産又は固定負債に属するものとする。
- 3 現金及び預金は、原則として、流動資産に属するが、預金については、一年以内に期限が到来するものは、流動資産に属するものとし、期限が一年を超えて到来するものは、投資その他の資産に属するものとする。
- 4 売買目的有価証券及び一年以内に満期の到来する国債、地方債、政府保証債その他の債券は流動資産に属するものとし、それ以外の有価証券は投資その他の資産に属するものとする。
- 5 製品、半製品、原材料、仕掛品、医薬品、診療材料等のたな卸資産（以下同じ。但し、基準第51及び第55については、医薬品及び診療材料を除く。）は、流動資産に属するものとし、国立大学法人等がその業務目的を達成するために所有し、かつ、その加工若しくは売却を予定しない財貨は、固定資産に属するものとする。
- 6 なお、固定資産のうち残存耐用年数が一年以下となったものも流動資産とせず固定資産に含ませ、たな卸資産のうち恒常在庫品として保有するもの又は余剰品として長期間にわたって所有するものも固定資産とせず流動資産に含ませるものとする。

## 第10 有形固定資産

次に掲げる資産（ただし、(1)から(7)までに掲げる資産については、国立大学法人等の通常の業務活動の用に供するものに限る。）は、有形固定資産に属するものとする。

- (1) 土地
- (2) 建物及び附属設備
- (3) 構築物（土地に定着する土木設備又は工作物をいう。以下同じ。）
- (4) 機械及び装置並びにその他の附属設備
- (5) 工具、器具及び備品。ただし、耐用年数一年以上のものに限る。
- (6) 図書
- (7) 美術品、收藏品（標本を含む。以下同じ。）
- (8) 船舶及び水上運搬具
- (9) 車両その他の陸上運搬具
- (10) 建設仮勘定（(1)から(4)まで、(8)及び(9)に掲げる資産で通常の業務活動の用に供することを前提として、建設又は製作途中における当該建設又は製作のために支出した金額及び充当した材料をいう。以下同じ。）

(11) その他の有形資産で流動資産又は投資たる資産に属しないもの

### 第11 無形固定資産

特許権、借地権、地上権、商標権、実用新案権、意匠権、鉱業権、漁業権、ソフトウェアその他これらに準ずる資産は、無形固定資産に属するものとする。

### 第12 投資その他の資産

1 流動資産、有形固定資産又は無形固定資産に属するもの以外の長期資産は、投資その他の資産に属するものとする。

2 次に掲げる資産は、投資その他の資産に属するものとする。

(1) 投資有価証券。ただし、関係会社（「~~第91~~93 連結の範囲」及び「~~第101~~103 関連会社等に対する持分法の適用」において定める特定関連会社及び関連会社をいう。）有価証券を除く。

(2) 関係会社株式

(3) その他の関係会社有価証券

(4) 長期貸付金。ただし、関係法人（「第89 連結財務諸表の作成目的」において定める関係法人をいう。）に対する長期貸付金（以下「関係法人長期貸付金」という。）を除く。

(5) 関係法人長期貸付金

(6) 破産債権、再生債権、更生債権その他これらに準ずる債権

(7) 長期前払費用。~~ただし、債券発行差金を除く。~~

~~(8) 債券発行差金~~

~~(9)~~(8) 未収財源措置予定額（「第80 事後に財源措置が行われる特定の費用に係る会計処理」により計上される未収財源措置予定額をいう。以下同じ。）

~~(10)~~(9) その他

### 第13 流動資産

次に掲げる資産は、流動資産に属するものとする。（注9）

(1) 現金及び預金。ただし、一年以内に期限の到来しない預金を除く。

(2) 未収入金（国立大学法人等の通常の業務活動において発生した未収入金をいう。ただし、破産債権、再生債権、更生債権その他これらに準ずる債権で一年以内に回収されないことが明らかなものを除く。以下同じ。）

(3) 受取手形（国立大学法人等の通常の業務活動において発生した手形債権をいう。ただし、破産債権、再生債権、更生債権その他これらに準ずる債権で一年以内に回収されないことが明らかなものを除く。以下同じ。）

(4) 有価証券で、「第31 有価証券の評価基準及び評価方法」において定める売買目的有価証券及び一年以内に満期の到来するもの

(5) 商品

(6) 製品、副産物及び作業くず

(7) 半製品



- (8) 原料及び材料（購入部分品を含む。）
- (9) 仕掛品
- (10) 医薬品
- (11) 診療材料
- (12) 消耗品、消耗工具、器具及び備品その他の貯蔵品で相当価額以上のもの
- (13) 前渡金（原材料、商品等の購入のための前渡金をいう。ただし、破産債権、再生債権、更生債権その他これらに準ずる債権で一年以内に回収されないことが明らかなものを除く。以下同じ。）
- (14) 前払費用で一年以内に費用となるべきもの（注10）
- (15) 未収収益で一年以内に対価の支払を受けるべきもの（注10）
- (16) その他の資産で一年以内に現金化できると認められるもの

<注10> 経過勘定項目について

1 前払費用

- (1) 前払費用は、一定の契約に従い、継続して役務の提供を受ける場合、いまだ提供されていない役務に対し支払われた対価をいう。
- (2) したがって、前払費用として対価を支払った国立大学法人等においては、いまだ提供されていない役務の提供を受けるという経済的便益が期待されるものであるため、前払費用は資産に属するものとする。

2 前受収益

- (1) 前受収益は、一定の契約に従い、継続して役務の提供を行う場合、いまだ提供していない役務に対し支払を受けた対価をいう。
- (2) したがって、前受収益として対価の支払を受けた国立大学法人等においては、いまだ提供していない役務の提供をしなければならず、経済的便益の減少を生じさせるものであるため、前受収益は負債に属するものとする。

3 未払費用

- (1) 未払費用は、一定の契約に従い、継続して役務の提供を受ける場合、既に提供された役務に対していまだその対価の支払が終らないものをいう。
- (2) したがって、既に提供された役務に対していまだ対価の支払を終えていない国立大学法人等においては、その対価の支払を行わなければならず、経済的便益の減少を生じさせるものであるため、未払費用は負債に属するものとする。

4 未収収益

- (1) 未収収益は、一定の契約に従い、継続して役務の提供を行う場合、既に提供した役務に対していまだその対価の支払を受けていないものをいう。
- (2) したがって、既に提供した役務に対していまだ対価の支払を受けていない国立大学法人等においては、その対価の支払を受けるという経済的便益が期待されるものであるため、資産に属するものとする。

第14 負債の定義

- 1 国立大学法人等の負債とは、過去の取引又は事象に起因する現在の義務であって、そ

の履行が国立大学法人等に対して、将来、教育研究の実施又は経済的便益の減少を生じさせるものをいう。

- 2 負債は、法律上の債務に限定されるものではない。
- 3 負債は、流動負債及び固定負債に分類される。

## 第15 固定負債

次に掲げる負債は、固定負債に属するものとする。（注9）

- (1) 資産見返負債（中期計画の想定範囲内で、運営費交付金により、又は国若しくは地方公共団体からの補助金等（補助金、負担金、交付金、補給金等の名称をもって交付されるものであって、相当の反対給付を求められないもの（運営費交付金及び施設費を除く。）をいう。以下同じ。）によりその交付の目的に従い、若しくは寄附金により寄附者の意図若しくは国立大学法人等があらかじめ特定した用途に従い償却資産を取得した場合（これらに関し、長期の契約により固定資産を取得する場合であって、当該契約に基づき前払金又は部分払金を支払った場合を含む。）に計上される負債をいう。）
- (2) 寄附金債務で一年以内に使用されないと認められるもの
- (3) 前受受託研究費等（受託研究費及び共同研究費を受領した場合に計上される負債をいう。以下同じ。）で一年以内に使用されないと認められるもの
- (4) 前受受託事業費等（受託事業費及び共同事業費を受領した場合に計上される負債をいう。以下同じ。）で一年以内に使用されないと認められるもの
- (5) 国立大学財務・経営センター債務負担金（国立学校特別会計から独立行政法人国立大学財務・経営センターが承継した借入金の償還のための独立行政法人国立大学財務・経営センターへの拠出債務をいう。以下同じ。）
- (6) 長期借入金
- (7) 国立大学法人等債（国立大学法人法第33条の規定により発行する債券をいう。以下同じ。）で一年以内に償還されないもの
- (8) 退職給付（国立大学法人等の役員及び教職員の退職を事由として支払われる退職一時金、厚生年金基金から支払われる年金給付をいう。以下同じ。）に係る引当金
- (9) 退職給付に係る引当金及び資産に係る引当金以外の引当金であって、一年以内に使用されないと認められるもの
- (10) 長期未払金
- (11) その他の負債で流動負債に属しないもの

## 第16 流動負債

次に掲げる負債は、流動負債に属するものとする。（注9）

- (1) 運営費交付金債務
- (2) 授業料債務（当該年度に係る授業料及び前受金に係る授業料相当額を振り替えたものをいう。以下同じ。）
- (3) 預り施設費
- (4) 預り補助金等。ただし、預り科学研究費補助金等（科学研究費補助金等の当該国立大学法人等以外を補助対象とする補助金を受領した場合に計上される負債をいう。以下

- 同じ。)及び固定負債に属するものを除く。
- (5) 寄附金債務。ただし、固定負債に属するものを除く。
  - (6) 前受受託研究費等。ただし、固定負債に属するものを除く。
  - (7) 前受受託事業費等。ただし、固定負債に属するものを除く。
  - (8) 前受金（年度開始前に受領した当該年度に係る授業料等をいう。以下同じ。）
  - (9) 預り科学研究費補助金等
  - (10) 預り金（(3)、(4)及び(9)を除く。以下同じ。）
  - (11) 短期借入金
  - (12) 一年以内償還予定国立大学法人等債
  - (13) 未払金（国立大学法人等の通常の業務活動に基づいて発生した未払金をいう。以下同じ。）
  - (14) 前受収益で一年以内に収益となるべきもの（注10）
  - (15) 未払費用で一年以内に対価の支払をすべきもの（注10）
  - (16) 未払消費税等
  - (17) 引当金（資産に係る引当金及び固定負債に属する引当金を除く。）
  - (18) その他の負債で一年以内に支払われ又は返済されると認められるもの

#### 第17 引当金

- 1 将来の支出の増加又は将来の収入の減少であって、その発生が当期以前の事象に起因し、発生の可能性が高く、かつ、その金額を合理的に見積もることができる場合には、当該金額を引当金として流動負債又は固定負債に計上するとともに、当期の負担に帰すべき金額を費用に計上する。ただし、引当金のうち資産に係る引当金の場合は、資産の控除項目として計上する。
- 2 法令、中期計画等に照らして客観的に財源が措置されていると明らかに見込まれる将来の支出については、引当金を計上しない。
- 3 発生の可能性の低い偶発事象に係る費用又は損失については、引当金は計上することができない。

#### 第18 ~~資本~~純資産の定義

- 1 国立大学法人等の~~資本~~純資産とは、国立大学法人等の業務を確実に実施するために与えられた財産的基礎及びその業務に関連し発生した剰余金から構成されるものであって、資産から負債を控除した額に相当するものをいう。
- 2 ~~資本~~純資産は、資本金、資本剰余金及び利益剰余金に分類される。

#### 第19 資本金等

- 1 資本金とは、国立大学法人等に対する出資を財源とする払込資本に相当する。
- 2 資本剰余金とは、資本金及び利益剰余金以外の~~資本~~純資産であって、贈与資本及び評価替資本が含まれる。（注11）（注12）
- 3 利益剰余金とは、国立大学法人等の業務に関連し発生した剰余金であって、稼得資本に相当する。

<注11> 資本剰余金を計上する場合について

- 1 国立大学法人等が固定資産を取得した場合において、取得原資拠出者の意図や取得資産の内容等を勘案し、国立大学法人等の財産的基礎を構成すると認められる場合には、相当額を資本剰余金として計上する。
- 2 具体的には、以下のような場合が想定される。
  - (1) 国又は独立行政法人国立大学財務・経営センターからの施設費により非償却資産又は「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」を行うこととされた償却資産を取得した場合
  - (2) 国又は地方公共団体からの補助金等により非償却資産を取得した場合
  - (3) 中期計画に定める「剰余金の使途」として固定資産を取得した場合
  - (4) 中期計画の想定範囲内で、運営費交付金により非償却資産を取得した場合
  - (5) 中期計画の想定範囲内で、授業料債務により非償却資産を取得した場合
  - (6) 中期計画の想定範囲内で、寄附金により、寄附者の意図に従い、又は国立大学法人等があらかじめ特定した使途に従い、非償却資産を取得した場合
- 3 なお、2(2)、(4)から(6)までの場合において償却資産を取得した場合には、相当額を資産見返負債として計上する。その際、取得原資が、運営費交付金及び当該年度に係る授業料の場合は、資産見返運営費交付金等とする。

<注12> 民間出えん金について

- 1 中期計画等において、国立大学法人等の財産的基礎に充てる目的で民間からの出えんを募ることが明らかにされている場合であって、当該中期計画等に従って出えんを募った場合には、当該民間出えん金は、国立大学法人等の財産的基礎を構成すると認められることから、資本剰余金として計上する。
- 2 資本剰余金として計上した民間出えん金は、出えんに係る事業が終了した場合等、出えんを募った際の条件に基づき出えん者に払い戻す場合を除き、取り崩すことはできない。

## 第20 費用の定義

国立大学法人等の費用とは、教育研究の実施、財貨の引渡又は生産その他の国立大学法人等の業務に関連し、その資産の減少又は負債の増加（又は両者の組合せ）をもたらす経済的便益の減少であって、国立大学法人等の財産的基礎を減少させる資本取引によってもたらされるものを除くものをいう。（注13）

<注13> 国立大学法人等の費用の定義から除かれる事例について

資本取引として国立大学法人等の費用から除外されるものの例は、以下のとおり。

- (1) 「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」を行うこととされた償却資産の減価償却相当額
- (2) 上記(1)の償却資産の売却、交換又は除去等に直接起因する資産の減少又は負債の増加（又は両者の組合せ）

(3) 別添の規定により、国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行ったにもかかわらず生じた減損額

## 第21 収益の定義

国立大学法人等の収益とは、教育研究の実施、財貨の引渡又は生産その他の国立大学法人等の業務に関連し、その資産の増加又は負債の減少（又は両者の組合せ）をもたらす経済的便益の増加であって、国立大学法人等の財産的基礎を増加させる資本取引によってもたらされるものを除くものをいう。（注14）

<注14> 国立大学法人等の収益の定義から除かれる事例について

資本取引として国立大学法人等の収益から除外されるものの例として、「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」を行うこととされた償却資産の売却、交換又は除去等に直接起因する資産の増加又は負債の減少（又は両者の組合せ）がある。

## 第22 キャッシュ・フロー計算書の資金

国立大学法人等のキャッシュ・フロー計算書が対象とする資金の範囲は、手元現金及び要求払預金とする。（注15）（注16）

<注15> 貸借対照表との関連性について

キャッシュ・フロー計算書の資金の期末残高と貸借対照表上の科目との関連性については注記するものとする。

<注16> 要求払預金について

要求払預金には、例えば、当座預金、普通預金、通知預金及びこれらの預金に相当する郵便貯金が含まれる。

## 第23 国立大学法人等業務実施コストの定義

国立大学法人等の国立大学法人等業務実施コストとは、国立大学法人等の業務運営に関して、国民の負担に帰せられるコストをいう。

## 第24 国立大学法人等業務実施コスト

次に掲げるコストは、国立大学法人等業務実施コストに属するものとする。

(1) 国立大学法人等の損益計算上の費用から運営費交付金及び国又は地方公共団体からの補助金等に基づく収益以外の収益を控除した額（注17）

(2) 「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」を行うこととされた償却資産の減価償却相当額

(3) 「第84 賞与引当金に係る会計処理」により、引当金を計上しないこととされた場合の賞与増加見積額

~~(3)~~ (4) 「~~第84~~ 85 退職給付に係る会計処理」により、引当金を計上しないこととさ

れた場合の退職給付の増加見積額

~~(4)~~ (5) 国又は地方公共団体の資産を利用することから生ずる機会費用（注18）

ア 国又は地方公共団体の財産の無償又は減額された使用料による貸借取引から生ずる機会費用

イ 政府出資等から生ずる機会費用

ウ 国又は地方公共団体からの無利子又は通常よりも有利な条件による融資取引から生ずる機会費用

~~(5)~~ (6) 別添の規定により、国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行ったにもかかわらず生じた減損額

<注17> 国立大学法人等業務実施コスト計算における損益計算上の費用及び控除すべき収益の範囲について

1 損益計算上の費用には、損益計算書上の費用に計上された国庫納付額も含まれる。

2 国立大学法人等業務実施コストとは、国立大学法人等の業務運営に関して、国民の負担に帰せられるコストであることから、損益計算上の費用から控除すべき収益は、国民負担に帰せられない自己収入に限られる必要があり、例えば、次のような収益は控除すべき収益には含まれない。

(1) 特殊法人又は他の独立行政法人等から交付される補助金又は助成金等に係る収益のうち、当該交付法人が国又は地方公共団体から交付された補助金等を財源とするもの

(2) 国からの現物出資が、消費税の課税仕入とみなされることによって生じた還付消費税に係る収益

(3) 財源措置予定額収益

<注18> 機会費用について

1 国又は地方公共団体の財産の減額された使用料による貸借とは、貸主である国又は地方公共団体が法令の規定に従い減額して貸し付けている場合の当該貸借をいう。

2 国又は地方公共団体からの有利な条件による融資とは、貸主である国又は地方公共団体が政策的に低利融資を行っている場合の当該融資をいう。

### 第3章 認識及び測定

#### 第25 取得原価主義

貸借対照表に記載する資産の価額は、原則として、当該資産の取得原価を基礎として計上しなければならない。

#### 第26 無償取得資産の評価原則

譲与、贈与その他無償で取得した資産については、公正な評価額をもって取得原価とする。

## 第27 有形固定資産の評価方法

- 1 有形固定資産については、その取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額（別添「第9 貸借対照表における表示」~~注~~1に規定する減損損失累計額をいう。以下同じ。）を控除した価額をもって貸借対照表価額とする。
- 2 有形固定資産の取得原価については、原則として当該資産の引取費用等の付随費用を含めて算定した金額とする。
- 3 政府からの現物出資として受け入れた固定資産については、国立大学法人法の現物出資の根拠規定に基づき評価委員が決定した価額を取得価額とする。
- 4 償却済の有形固定資産は、除却されるまで残存価額又は備忘価額で記載する。

## 第28 無形固定資産の評価

無形固定資産については、当該資産の取得のために支出した金額から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額をもって貸借対照表価額とする。（注19）

### <注19> ソフトウェアについて

- 1 ソフトウェア（コンピュータを機能させるように指令を組み合わせて表現したプログラム等をいう。以下同じ。）を用いて外部に業務処理等のサービスを提供する契約等が締結されている場合のように、その提供により将来の収益獲得が確実であると認められる場合には、適正な原価を集計した上、当該ソフトウェアの制作に要した費用に相当する額を無形固定資産として計上しなければならない。
- 2 国立大学法人等内利用のソフトウェアについては、完成品を購入した場合のように、その利用により将来の収益獲得又は費用削減が確実であると認められる場合には、当該ソフトウェアの取得に要した費用に相当する額を無形固定資産として計上しなければならない。
- 3 機械装置等に組み込まれているソフトウェアについては、原則として当該機械装置等に含めて処理する。

## 第29 リース資産の会計処理

リース取引に係る会計基準については、リース取引をファイナンス・リース取引とオペレーティング・リース取引の二種類に分け、ファイナンス・リース取引については、通常の売買取引に係る方法に準じて会計処理を行い、かつ、当該ファイナンス・リース取引が損益に与える影響額等を財務諸表に注記する。オペレーティング・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行い、かつ、リース期間の中途において当該契約を解除することができるオペレーティング・リース取引を除き、次に掲げる事項を財務諸表に注記する。（注20）

- (1) 貸借対照表日後一年以内のリース期間に係る未経過リース料
- (2) 貸借対照表日後一年を超えるリース期間に係る未経過リース料

### <注20> リース資産の表示方法について

≠ ファイナンス・リース取引とは、リース契約に基づくリース期間の中途において当該契約を解除することができないリース取引又はこれに準ずるリース取引で、借り手が、当該契約に基づき使用する物件（以下「リース物件」という。）からもたらされる経済的便益を実質的に享受することができ、かつ、当該リース物件の使用に伴って生じるコストを実質的に負担することとなるリース取引をいう。オペレーティング・リース取引とは、ファイナンス・リース取引以外のリース取引をいう。

~~2 国立大学法人等におけるファイナンス・リース取引の会計基準については、国立大学法人等が公共性等共通の性格を持ち、一の統一した制度の下に存在するものであって、その比較可能性を考慮した場合、企業会計原則では認められている「通常の貸借取引に係る方法に準じた」会計処理を選択的に認めることは適切ではないことから、通常の売買取引に係る方法に準じた処理を行うものとする。~~

### 第30 たな卸資産の評価方法

- 1 たな卸資産については、原則として購入代価又は製造原価に引取費用等の付随費用を加算し、これに原則として移動平均法を適用して算定した取得原価をもって貸借対照表価額とする。（注21）
- 2 ただし、時価が取得原価よりも下落した場合には時価をもって貸借対照表価額としなければならない。
- 3 なお、たな卸資産の評価方法は毎事業年度継続して適用しなければならず、みだりに変更してはならない。

#### <注21> たな卸資産の貸借対照表価額について

たな卸資産の貸借対照表価額の算定のための方法である移動平均法とは、単価の異なる仕入れが行われる毎に、当該仕入直前の残高（金額）と当該仕入額との合計額を、残高数量と当該仕入数量の合計数量で割って平均原価を求め、これを順次、その後の払出単価とする方法である。

### 第31 有価証券の評価基準及び評価方法

- 1 有価証券の取得原価は、購入代価に手数料等の付随費用を加算し、これに平均原価法等の方法を適用して算定した金額とする。
- 2 有価証券は、国立大学法人等が保有する目的により、次のように区分し、評価差額等について処理した上、それぞれ区分ごとの評価額をもって貸借対照表価額としなければならない。

#### (1) 売買目的有価証券

時価の変動により利益を得ることを目的として保有する有価証券（以下「売買目的有価証券」という。）は、時価をもって貸借対照表価額とし、評価差額は当期の損益として処理する。（注22）

#### (2) 満期保有目的の債券

満期まで所有する意図をもって保有する国債、地方債、政府保証債、その他の債券



(以下「満期保有目的の債券」という。)は、取得原価をもって貸借対照表価額とする。ただし、債券を債券金額より低い価額又は高い価額で取得した場合において、取得価額と債券金額との差額の性格が金利の調整と認められるときは、償却原価法に基づいて算定された価額をもって貸借対照表価額としなければならない。(注23)(注24)(注25)

### (3) 関係会社株式

関係会社株式は、取得原価をもって貸借対照表価額とする。ただし、当該会社の財務諸表を基礎とした純資産額に持分割合を乗じて算定した額が取得原価よりも下落した場合には、当該算定額をもって貸借対照表価額とし、評価差額は当期の費用として処理するとともに、翌期首に取得原価に洗い替えなければならない。

### (4) その他の有価証券

売買目的有価証券、満期保有目的の債券及び関係会社株式以外の有価証券(以下「その他有価証券」という。)は、時価をもって貸借対照表価額とし、評価差額はその全額を~~資本純資産~~の部に計上し、翌期首に取得原価に洗い替えなければならない。なお、~~資本純資産~~の部に計上されるその他有価証券の評価差額については、~~資本純資産~~の部に計上される他の剰余金と区分して記載しなければならない。(注22)

3 満期保有目的の債券及びその他有価証券のうち市場価格のあるものについて時価が著しく下落したときは、回復する見込みがあると認められる場合を除き、時価をもって貸借対照表価額とし、評価差額は当期の費用として処理しなければならない。

市場価格のない株式については、発行会社の財政状態の悪化により実質価額が著しく低下したときは、相当の減額をなし、評価差額は当期の費用として処理しなければならない。

#### <注22> 時価について

時価とは、公正な評価額をいい、市場において形成されている取引価格、気配又は指標その他の相場に基づく価額をいう。市場において形成されている取引価格、気配又は指標その他の相場がない場合には、合理的に算定された価額を公正な評価額とする。

#### <注23> 償却原価法について

償却原価法とは、債券を債券金額より低い価額又は高い価額で取得した場合において、当該差額に相当する金額を償還期に至るまで每期一定の方法で貸借対照表価額に加減する方法をいう。なお、この場合には、当該加減額を受取利息に含めて処理する。

#### <注24> 満期保有目的の債券とその他有価証券との区分

1 その他有価証券とは、売買目的有価証券、満期保有目的の債券及び関係会社株式以外の有価証券であり、長期的な時価の変動により利益を得ることを目的として保有する有価証券が含まれることになる。

2 余裕資金等の運用として、利息収入を得ることを主たる目的として保有する国債、地方債、政府保証債、その他の債券であって、長期保有の意思をもって取得した債券は、資金繰り等から長期的には売却の可能性が見込まれる債券であっても、満期保有目的の

債券に区分することとする。

<注25> 満期保有目的の債券の保有目的の変更について

満期保有目的の債券を償還期限前に売却した場合には、次に掲げる場合を除き、当該売却した債券と同じ事業年度に購入した残りの満期保有目的の債券の全てについて、保有目的の変更があったものとして売買目的有価証券に振り替えなければならない。

- (1) 満期保有目的の債券を購入した中期目標期間後の中期目標期間において、中期計画上の資金計画において、満期保有目的の債券の売却収入を財源とした事業計画が策定されている場合であって、当該事業計画に従って売却した場合
- (2) 満期保有目的の債券を購入した中期目標期間後の中期目標期間において、金利情勢の変化に対応して、より運用利回りの高い債券に切り換えるため、又は国立大学法人等が定める信用上の運用基準に該当しなくなったことに伴い、運用基準に該当する他の債券に切り換えるために売却した場合

第32 貸付金等の貸借対照表価額

- 1 未収入金、貸付金、割賦元金等の債権の貸借対照表価額は、取得価額から貸倒引当金を控除した金額とする。なお、貸倒引当金は、資産の控除項目として貸借対照表に計上するものとする。
- 2 貸倒引当金は、債権全体又は同種・同類の債権ごとに、債権の状況に応じて求めた過去の貸倒実績率等合理的な基準により算定する。なお、貸倒引当金の算定について、他の方法によることがより適当であると認められる場合には、当該方法により算定することができる。

第33 債務保証の会計処理

- 1 国立大学法人等が民間企業等の債務の保証を行っている場合は、債務保証の履行によって損失が生じると見込まれる額を保証債務損失引当金として計上しなければならない。
- 2 保証債務損失引当金の額は、主たる債務者の財政状態、担保価値の評価、プロジェクトの損益の見込、他の保証人の負担能力等を総合的に判断して見積もらなければならない。
- 3 決算日における債務保証の総額は、注記しなければならない。また、保証債務の明細、増減及び保証料収益との関係並びに保証債務損失引当金の増減を附属明細書において明らかにしなければならない。

第34 外貨建取引の会計処理

- 1 外貨建取引は、原則として、当該取引発生時の為替相場による円換算額をもって記録する。(注26) (注27)
- 2 在外事務所における外貨建取引については、原則として、主たる事務所と同様に処理する。ただし、外国通貨で表示されている在外事務所の財務諸表に基づき国立大学法人等の財務諸表を作成する場合には、在外事務所の財務諸表の費用及び収益(費用性資産

の費用化額及び収益性負債の収益化額を除く。)の換算については、期中平均相場によることができる。

3 外国通貨、外貨建金銭債権債務及び外貨建有価証券については、決算時において、次の区分ごとの換算額をもって貸借対照表価額とする。

(1) 外国通貨については、決算時の為替相場による円換算額

(2) 外貨建金銭債権債務については、決算時の為替相場による円換算額

(3) 外貨建有価証券の換算額については、保有目的による区分に応じ、次により換算した額

ア 満期保有目的の外貨建債券については、決算時の為替相場による円換算額

イ 売買目的有価証券及びその他有価証券については、外国通貨による時価を決算時の為替相場により円換算した額

ウ 関係会社株式については、取得時の為替相場による円換算額。ただし、当該会社の財務諸表を基礎とした純資産額に持分割合を乗じて外国通貨により算定した額が外国通貨による取得原価よりも下落した場合には、当該算定額を決算時の為替相場により円換算した額

4 外貨建有価証券について時価の著しい下落又は実質価額の著しい低下により評価額の引下げが求められる場合には、当該有価証券の時価又は実質価額は、外国通貨による時価又は実質価額を決算時の為替相場により円換算した額とする。

5 決算時における換算によって生じた換算差額は、当期の為替差損益として処理する。ただし、外貨建有価証券換算差額については、時価の著しい下落又は実質価額の著しい低下により、決算時の為替相場による換算を行ったことによって生じた換算差額は、当期の有価証券の評価損として処理するほか、次に定めるところにより処理するものとする。

(1) 満期保有目的の外貨建債券について決算時の為替相場による換算を行うことによって生じた換算差額は、当期の為替差損益として処理する。

(2) 売買目的の外貨建債券について決算時の為替相場による換算を行うことによって生じた換算差額は、当期の有価証券評価損益として処理する。

(3) 外貨建の関係会社株式について決算時の為替相場による換算を行うことによって生じた換算差額は、当期の有価証券評価損益として処理する。

(4) 外貨建のその他有価証券について決算時の為替相場による換算を行うことによって生じた換算差額は、~~資本~~純資産の部に計上し、翌期首に取得原価に洗い替える。

#### <注 2 6> 取引発生時の為替相場について

取引発生時の為替相場とは、取引が発生した日における直物為替相場又は合理的な基準に基づいて算定された平均相場、例えば取引の行われた月又は週の前月又は前週の直物為替相場を平均したもの等、直近の一定期間の直物相場に基づいて算出されたものとする。ただし、取引が発生した日の直近の一定の日における直物為替相場、例えば取引の行われた月若しくは週の前月若しくは前週の末日又は当月若しくは当週の初日の直物為替相場によることも認められる。

<注27> 外国通貨による記録について

外貨建債権債務及び外国通貨の保有状況並びに決済方法等から、外貨建取引について当該取引発生時の外国通貨により記録することが合理的であると認められる場合には、取引発生時の外国通貨の額をもって記録する方法を採用することができる。この場合には、外国通貨の額をもって記録された外貨建取引は、各月末等一定の時点において、当該時点の直物為替相場又は合理的な基礎に基づいて算定された一定期間の平均相場による円換算額を付するものとする。

第35 退職給付引当金の計上方法

- 1 退職給付引当金は、退職給付債務に未認識過去勤務債務及び未認識数理計算上の差異を加減した額から年金資産の額を控除した額を計上しなければならない。
- 2 退職給付債務は、国立大学法人等の役員及び教職員の退職時に見込まれる退職給付の総額のうち、期末までに発生していると認められる額を一定の割引率及び予想される退職時から現在までの期間に基づき割り引いて計算する。(注28)(注29)
- 3 退職給付債務には、退職一時金のほか、厚生年金基金から支給される年金給付に係る債務が含まれる。
- 4 未認識過去勤務債務とは、退職給付水準の改訂等に起因して発生した退職給付債務の増加又は減少部分のうち、費用処理(費用の減額処理又は費用を超過して減額した場合の利益処理を含む。次項において同じ。)されていないものをいう。未認識過去勤務債務は、平均残存勤務期間内の一定年数で均等償却することができる。
- 5 未認識数理計算上の差異とは、年金資産の期待運用収益と実際の運用収益との差異、退職給付債務の数理計算に用いた見積数値と実績との差異及び見積数値の変更等により発生した差異のうち、費用処理されていないものをいう。未認識数理計算上の差異は、平均残存勤務期間内の一定年数で均等償却することができる。
- 6 年金資産の額は、厚生年金基金が運用している年金資産を期末における公正な評価額により計算する。
- 7 複数の事業主により設立された厚生年金基金に加入している場合においては、退職給付債務の比率その他の合理的な基準により、国立大学法人等の負担に属する年金資産等の計算を行うこととする。
- 8 教職員の数が300人未満の国立大学法人等については、退職給付債務のうち、退職一時金に係る債務については、期末要支給額によることができる。(注30)

<注28> 退職給付の総額のうち期末までに発生していると認められる額

退職給付の総額のうち期末までに発生していると認められる額は、退職給付見込額について全勤務期間で除した額を各期の発生額とする方法その他の役員及び教職員の勤務の対価を合理的に反映する方法を用いて計算しなければならない。

<注29> 割引率について

退職給付債務の計算における割引率は、安全性の高い長期の債券の利回りを基準として決定しなければならない。

#### <注30> 簡便法による退職給付債務の見積について

教職員の数が300人未満の国立大学法人等については、退職一時金に係る債務については、期末要支給額によることができるが、年金債務については、簡便法によることは認められない。

### 第36 費用配分の原則

- 1 資産の取得原価は、資産の種類に応じた費用配分の原則によって、各事業年度に配分しなければならない。
- 2 有形固定資産は、当該資産の耐用年数にわたり、無形固定資産は、当該資産の有効期間にわたり、減価償却の方法によって、その取得原価を各事業年度に配分しなければならない。
- 3 減価償却の方法は、有形固定資産及び無形固定資産のいずれについても定額法によるものとする。

(注31) (注32)

#### <注31> 図書の評価方法について

図書（印刷その他の方法により複製した文書又は図画、又は電子的方法、磁気的方法その他の人の知覚によっては認識できない方法により文字、映像、音を記録した物品としての管理が可能な物。以下同じ。）は国立大学法人等にとって、教育研究の基礎となるものであることから、雑誌やパンフレット等教育研究上一時的な意義しか有さないものを除き、有形固定資産として取得原価をもって貸借対照表価額とする。

なお、図書は個々により使用の実態が大きく異なること及び比較的少額かつ大量にあることから、図書を除却する際に費用として認識することとし、使用期間中における減価償却は行わないこととする。

#### <注32> 美術品・収蔵品の評価方法について

美術品・収蔵品については、原則として取得原価によることとする。なお、美術品・収蔵品については減価償却は行わないこととする。

### 第37 発生主義の原則

- 1 国立大学法人等に発生したすべての費用及び収益は、その支出及び収入に基づいて計上し、その発生した期間に正しく割当てられるように処理しなければならない。
- 2 なお、未実現収益は、原則として、当期の損益計算に計上してはならない。

## 第4章 財務諸表の体系

### 第38 財務諸表の体系

国立大学法人等の財務諸表の体系は、次のとおりである。

- (1) 貸借対照表
- (2) 損益計算書
- (3) キャッシュ・フロー計算書
- (4) 利益の処分又は損失の処理に関する書類
- (5) 国立大学法人等業務実施コスト計算書
- (6) 附属明細書

### 第39 セグメント情報の開示

- 1 国立大学法人等における開示すべきセグメント情報は、当該法人の業務内容等に応じた適切な区分に基づくセグメント情報とする。
- 2 開示すべき情報は、業務収益、業務損益及び当該セグメントに属する総資産額とする。(注33)

#### <注33> セグメント情報の開示について

- 1 ~~国立大学法人等においても、その業務の内容が多岐にわたる場合、説明責任の観点から、その業務ごとのセグメントに係る財務情報を開示する必要がある。国立大学法人等は、業績評価のための情報提供等による国民その他の利害関係者に対する説明責任を果たす観点から、その業務の内容が多岐にわたる場合、区分及び開示内容について企業会計で求められるよりも詳細なセグメントに係る財務情報を開示することが求められる。~~
- 2 ~~またこのため、~~開示すべき情報についても、~~国民その他の利害関係者に対する説明責任を果たすため、~~主要な資産項目、主要な事業費用及び主要な事業収益(国又は地方公共団体による財源措置等を含む。)の内訳を積極的に開示する必要がある。
- 3 セグメントの区分については、運営費交付金に基づく収益以外の収益の性質や複数の業務を統合した法人における業務の区分を参考にしつつ、各国立大学法人等において個々に定めていくこととする。ただし、比較可能性の確保の観点から、一定のセグメント情報については、全ての国立大学法人等において共通に開示する必要がある。

### 第40 貸借対照表の作成目的

貸借対照表は、国立大学法人等の財政状態を明らかにするため、貸借対照表日におけるすべての資産、負債及び~~資本~~純資産を記載し、国民その他の利害関係者にこれを正しく表示するものでなければならない。

### 第41 損益計算書の作成目的

- 1 損益計算書は、国立大学法人等の運営状況を明らかにするため、一会計期間に属する国立大学法人等のすべての費用とこれに対応するすべての収益とを記載して当期純利益を表示しなければならない。
- 2 損益計算書は、準用通則法第44条にいう利益又は損失を確定するため、当期純利益に必要な項目を加減して、当期総利益を表示しなければならない。

### 第42 キャッシュ・フロー計算書の作成目的

キャッシュ・フロー計算書は、国立大学法人等の一会計期間におけるキャッシュ・フローの状況を報告するため、キャッシュ・フローを一定の活動区分別に表示しなければならない。（注34）

#### <注34> キャッシュ・フロー計算書の位置付けについて

キャッシュ・フロー計算書は、一会計期間におけるキャッシュ・フローの状況を一定の活動区分別に表示するものであり、貸借対照表及び損益計算書と同様に国立大学法人等の活動の全体を対象とする重要な情報を提供するものである。このようなキャッシュ・フロー計算書の重要性にかんがみ、国立大学法人等の財務諸表の一つに位置付けられるものとする。

#### 第43 利益の処分又は損失の処理に関する書類の作成目的

利益の処分又は損失の処理に関する書類は、国立大学法人等の当期末処分利益の処分又は当期末処理損失の処理の内容を明らかにするために作成しなければならない。

#### 第44 国立大学法人等業務実施コスト計算書の作成目的

国立大学法人等業務実施コスト計算書は、納税者である国民の国立大学法人等の業務に対する評価及び判断に資するため、一会計期間に属する国立大学法人等の業務運営に関し、国立大学法人等業務実施コストに係る情報を一元的に集約して表示する。（注35）

#### <注35> 国立大学法人等業務実施コスト計算書について

- 1 国立大学法人等業務実施コスト計算書は、国立大学法人等の業務運営に関して国民が負担するコストを集約し、情報開示の徹底を図り、納税者である国民の国立大学法人等における業務に対する評価及び判断に資するための書類である。国立大学法人等の損益計算書は法人の運営状況を表示する書類であり、ここに計上される損益は、法人の業績を示す損益であって必ずしも納税者にとっての負担とは一致しない。例えば、運営費交付金収益が増えると、国立大学法人等の損益にはプラスにはたらくが、納税者の負担は逆に増加する。また、損益計算を通じない場合の減価償却相当額、引当金を計上しない場合の退職給付増加見積額、国又は地方公共団体の財産や出資等を利用することから生じる機会費用等、国立大学法人等の損益計算書等には計上されないが、広い意味で最終的に国民の負担に帰すべきコストも存在する。国立大学法人等業務実施コスト計算書は、これらのコストを集約表示する書類である。
- 2 なお、表示すべき国立大学法人等業務実施コストには、政府内の企画立案部門の費用等までは含まないものとし、「第24 国立大学法人等業務実施コスト」で示した項目に限定する。
- 3 国立大学法人等業務実施コスト計算書は、独立行政法人における行政サービス実施コスト計算書と同一の位置付けを有する計算書類であり、国立大学法人等の財務諸表の一つに位置付けられるものとする。

## 第5章 貸借対照表

### 第45 表示区分

貸借対照表は、資産の部、負債の部及び~~資本~~純資産の部の三区分に分かち、更に資産の部を固定資産及び流動資産に、負債の部を固定負債及び流動負債に区分しなければならない。

### 第46 資産、負債及び~~資本~~純資産の記載の基準

資産、負債及び~~資本~~純資産は、適切な区分、配列、分類及び評価の基準に従って記載しなければならない。

### 第47 総額主義の原則

資産、負債及び~~資本~~純資産は、総額によって記載することを原則とし、資産の項目と負債又は~~資本~~純資産の項目とを相殺することによって、その全部又は一部を貸借対照表から除去してはならない。

### 第48 資産と負債・~~資本~~純資産の均衡

貸借対照表の資産の合計金額は、負債と~~資本~~純資産の合計金額に一致しなければならない。

### 第49 配列

資産及び負債の項目の配列は、この基準に定めるもののほか、固定性配列法によるものとする。

### 第50 貸借対照表科目の分類

- 1 資産、負債及び~~資本~~純資産の各科目は、一定の基準に従って明瞭に分類しなければならない。
- 2 資産は、固定資産に属する資産及び流動資産に属する資産に分類しなければならない。
- 3 負債は、固定負債に属する負債及び流動負債に属する負債に分類しなければならない。
- 4 ~~資本~~純資産は、資本金に属するもの、資本剰余金に属するもの及び利益剰余金に属するものに分類しなければならない。

### 第51 資産の表示項目

- 1 有形固定資産に属する資産は、次に掲げる項目の区分に従い、当該資産を示す名称を付した科目をもって表示しなければならない。
  - (1) 土地
  - (2) 建物（その附属設備を含む。以下同じ。）



- (3) 構築物
- (4) 機械及び装置（その附属設備を含む。以下同じ。）
- (5) 工具、器具及び備品
- (6) 図書
- (7) 美術品、収蔵品
- (8) 船舶（水上運搬具を含む。以下同じ。）
- (9) 車両その他の陸上運搬具
- (10) 建設仮勘定
- (11) その他

2 無形固定資産に属する資産は、次に掲げる項目の区分に従い、当該資産を示す名称を付した科目をもって表示しなければならない。

- (1) 特許権
- (2) 借地権（地上権を含む。）
- (3) 商標権
- (4) 実用新案権
- (5) 意匠権
- (6) 鉱業権
- (7) 漁業権
- (8) ソフトウェア
- (9) その他

3 投資その他の資産に属する資産は、次に掲げる項目の区分に従い、当該資産を示す名称を付した科目をもって表示しなければならない。

- (1) 投資有価証券（関係会社株式及びその他の関係会社有価証券を除く。）
- (2) 関係会社株式
- (3) その他の関係会社有価証券
- (4) 長期貸付金（関係法人長期貸付金を除く。）
- (5) 関係法人長期貸付金
- (6) 破産債権、再生債権、更生債権その他これらに準ずる債権
- (7) 長期前払費用 ~~（債券発行差金を除く。）~~
- ~~(8) 債券発行差金~~
- ~~(9)~~ (8) 未収財源措置予定額
- ~~(10)~~ (9) その他

4 流動資産に属する資産は、次に掲げる項目の区分に従い、当該資産を示す名称を付した科目をもって表示しなければならない。

- (1) 現金及び預金
- (2) 未収入金
- (3) 受取手形
- (4) 有価証券
- (5) たな卸資産（「第13 流動資産」(5)から(9)まで及び(12)に掲げる資産をいう。）

- (6) 医薬品及び診療材料
- (7) 前渡金
- (8) 前払費用
- (9) 未収収益
- (10) その他

## 第5-2 減価償却累計額の表示方法

- 1 有形固定資産に対する減価償却累計額は、その資産が属する科目ごとに取得原価から控除する形式で記載する。(注3-6)
- 2 無形固定資産については、減価償却累計額を控除した未償却残高を記載する。

### <注3-6> 減価償却累計額について

減価償却累計額には、各年度の損益計算書に計上された減価償却費の累計額だけでなく、損益外減価償却相当額の累計額が含まれる。

## 第5-3 負債の表示項目

- 1 固定負債に属する負債は、次に掲げる項目の区分に従い、当該負債を示す名称を付した科目をもって表示しなければならない。

- (1) 資産見返負債
- (2) 長期寄附金債務
- (3) 長期前受受託研究費等
- (4) 長期前受受託事業費等
- (5) 国立大学財務・経営センター債務負担金
- (6) 長期借入金
- (7) 国立大学法人等債
- (8) 引当金
- (9) 長期未払金
- (10) その他

- 2 流動負債に属する負債は、次に掲げる項目の区分に従い、当該負債を示す名称を付した科目をもって表示しなければならない。

- (1) 運営費交付金債務
- (2) 授業料債務
- (3) 預り施設費
- (4) 預り補助金等
- (5) 寄附金債務
- (6) 前受受託研究費等
- (7) 前受受託事業費等
- (8) 前受金
- (9) 預り金
- (10) 短期借入金

- (11) 一年以内返済予定長期借入金
- (12) 一年以内償還予定国立大学法人等債
- (13) 未払金
- (14) 前受収益
- (15) 未払費用
- (16) 未払消費税等
- (17) 引当金
- (18) その他

#### 第54 ~~資本~~純資産の表示項目

- 1 資本金は、政府出資金とそれ以外の者からの出資金（出資者等により適切な名称を付することを要する。）とに区分して表示しなければならない。
- 2 資本剰余金は、資本剰余金の総額を表示するとともに、「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」を行うこととされた償却資産の損益外減価償却相当額の累計額又は損益外減損損失相当額の累計額を、それぞれ損益外減価償却累計額又は損益外減損損失累計額として控除して表示しなければならない。（注37）
- 3 利益剰余金は、準用通則法第44条第1項に基づく積立金（以下「積立金」という。）、国立大学法人法において定められている前中期目標期間繰越積立金、準用通則法第44条第3項により中期計画で定める用途に充てるために、用途ごとに適当な名称を付した積立金（以下「目的積立金」という。）及び当期未処分利益に区分して表示する。なお、当期未処分利益の内訳として、当期総利益を表示するものとする。
- 4 その他有価証券の評価差額は、利益剰余金の次に別の区分を設け、その他有価証券評価差額金の科目により表示しなければならない。

#### <注37> 資本剰余金に含まれる民間出えん金の表示方法

資本剰余金として民間出えん金を計上する場合は、民間出えん金の科目により、他の資本剰余金と区分して表示しなければならない。

#### 第55 貸借対照表の様式

貸借対照表の標準的な様式は、次のとおりとする。

貸借対照表  
(平成〇〇年3月31日)

#### 資産の部

##### I 固定資産

##### 1 有形固定資産

土地	<u>XXX</u>	<del>XXX</del>	
<u>減損損失累計額</u>	<u>XXX</u>	<u>XXX</u>	

	建物	X X X	
	減価償却累計額	X X X	
	減損損失累計額	<u>X X X</u>	X X X
	構築物	X X X	
	減価償却累計額	X X X	
	減損損失累計額	<u>X X X</u>	X X X
	機械装置	X X X	
	減価償却累計額	X X X	
	減損損失累計額	<u>X X X</u>	X X X
	工具器具備品	X X X	
	減価償却累計額	X X X	
	減損損失累計額	<u>X X X</u>	X X X
	図書		X X X
	美術品・収蔵品		X X X
	船舶	X X X	
	減価償却累計額	X X X	
	減損損失累計額	<u>X X X</u>	X X X
	車両運搬具	X X X	
	減価償却累計額	X X X	
	減損損失累計額	<u>X X X</u>	X X X
	建設仮勘定		X X X
	.....		<u>X X X</u>
	有形固定資産合計		X X X
2	無形固定資産		
	特許権		X X X
	借地権		X X X
	商標権		X X X
	実用新案権		X X X
	意匠権		X X X
	鉱業権		X X X
	漁業権		X X X
	ソフトウェア		X X X
	.....		<u>X X X</u>
	無形固定資産合計		X X X
3	投資その他の資産		
	投資有価証券		X X X
	関係会社株式		X X X

長期貸付金		X X X	
関係法人長期貸付金		X X X	
長期前払費用		X X X	
<del>債券発行差金</del>		<del>X X X</del>	
未収財源措置予定額		X X X	
.....		<u>X X X</u>	
投資その他の資産合計		<u>X X X</u>	
固定資産合計			<u>X X X</u>

## II 流動資産

現金及び預金		X X X	
未収学生納付金収入	X X X		
徴収不能引当金	<u>X X X</u>	X X X	
未収附属病院収入	X X X		
徴収不能引当金	<u>X X X</u>	X X X	
受取手形	X X X		
貸倒引当金	<u>X X X</u>	X X X	
有価証券		X X X	
たな卸資産		X X X	
医薬品及び診療材料		X X X	
前渡金		X X X	
前払費用		X X X	
未収収益		X X X	
.....		<u>X X X</u>	
流動資産合計			<u>X X X</u>
資産合計			X X X

## 負債の部

### I 固定負債

資産見返負債			
資産見返運営費交付金等	X X X		
資産見返補助金等	X X X		
資産見返寄附金	X X X		
建設仮勘定見返運営費	X X X		
交付金			
建設仮勘定見返施設費	X X X		
建設仮勘定見返補助金等	<u>X X X</u>	X X X	
長期寄附金債務		X X X	
長期前受受託研究費等		X X X	

長期前受受託事業費等		X X X	
国立大学財務・経営センター債務負担金		X X X	
長期借入金		X X X	
国立大学法人等債	<u>X X X</u>	<del>X X X</del>	
<u>債券発行差額</u>	<u>X X X</u>	<u>X X X</u>	
引当金			
退職給付引当金	X X X		
追加退職給付引当金	X X X		
.....	<u>X X X</u>	X X X	
長期未払金		X X X	
.....		<u>X X X</u>	
固定負債合計			<u>X X X</u>

## II 流動負債

運営費交付金債務		X X X	
授業料債務		X X X	
預り施設費		X X X	
預り補助金等		X X X	
寄附金債務		X X X	
前受受託研究費等		X X X	
前受受託事業費等		X X X	
前受金		X X X	
預り金		X X X	
短期借入金		X X X	
一年以内返済予定長期借入金		X X X	
一年以内償還予定国立大学法人等債	<u>X X X</u>	<del>X X X</del>	
<u>債券発行差額</u>	<u>X X X</u>	<u>X X X</u>	
未払金		X X X	
前受収益		X X X	
未払費用		X X X	
未払消費税等		X X X	
引当金		X X X	
.....		<u>X X X</u>	
流動負債合計			<u>X X X</u>
負債合計			X X X

## ~~資本~~純資産の部

### I 資本金

	政府出資金	<u>X X X</u>	
	資本金合計		X X X
II	資本剰余金		
	資本剰余金	X X X	
	損益外減価償却累計額 (一)	— X X X	
	損益外減損損失累計額 (一)	— X X X	
	民間出えん金	<u>X X X</u>	
	資本剰余金合計		X X X
III	利益剰余金 (又は繰越欠損金)		
	前中期目標期間繰越積立金	X X X	
	(何) 積立金	X X X	
	積立金	X X X	
	当期未処分利益	<u>X X X</u>	
	(又は当期未処理損失)		
	(うち当期総利益 (又は当期総損失) X X X)		
	利益剰余金 (又は繰越欠損金) 合計		X X X
IV	その他有価証券評価差額金		<u>X X X</u>
	<del>資本</del> 純資産合計		<u>X X X</u>
	負債 <del>資本</del> 純資産合計		<u>X X X</u>

## 第6章 損益計算書

### 第56 表示区分

損益計算書には、経常損益計算及び純損益計算の区分を設けなければならない。

### 第57 総額主義の原則

費用及び収益は、総額によって記載することを原則とし、費用の項目と収益の項目とを直接に相殺することによってその全部又は一部を損益計算書から除去してはならない。

### 第58 費用収益対応の原則

費用及び収益は、その発生源泉に従って明瞭に分類し、各費用項目とそれに関連する収益項目とを損益計算書に対応表示しなければならない。

### 第59 損益計算書科目の分類

- 1 経常損益計算の区分は、当該国立大学法人等の業務活動から生じた費用及び収益を記載して、経常利益を計算する。
- 2 純損益計算の区分は、経常損益計算の結果を受けて、固定資産売却損益、減損損失、

災害損失等の臨時損益を記載し、当期純利益を計算する。(注38)

3 純損益計算の結果を受けて、目的積立金取崩額等を記載し、当期総利益を計算する。

<注38> 臨時損益項目について

臨時損益に属する項目であっても、金額の僅少なもの又は每期経常的に発生するものは、経常損益計算に含めることができる。

第60 費用の表示項目

業務費及び一般管理費については、これらを構成する費用の内容に応じて区分し、それぞれにその内容を表す適切な名称を付して表示するものとする。

第61 収益の表示項目

- 1 運営費交付金収益及び当該年度に係る授業料収益は、「第77 運営費交付金等の会計処理」による会計処理を行った結果、当期の収益として認識された額を表示する。
- 2 入学金収入、検定料収入、附属病院収入、受託研究等収入、受託事業等収入等については、教育研究等の実施によって実現したもののみをそれぞれ適切な名称を付して表示する。
- 3 補助金等収益は、「第79 補助金等の会計処理」による会計処理を行った結果、当期の収益として認識された額を表示する。なお、補助金等収益は、補助金等の交付決定区分ごとに適切な名称を付して表示する。
- 4 寄附金収益は、「第81 寄附金の会計処理」による会計処理を行った結果、当期の収益として認識された額を表示する。

第62 損益計算書の様式

損益計算書の標準的な様式は、次のとおりとする。

損益計算書

(平成〇〇年4月1日～平成〇〇年3月31日)

経常費用

業務費

教育経費	X X X
研究経費	X X X
診療経費	X X X
教育研究支援経費	X X X
受託研究費	X X X
受託事業費	X X X
役員人件費	X X X
教員人件費	X X X
職員人件費	X X X



.....	<u>X X X</u>	X X X	
一般管理費		X X X	
財務費用			
支払利息	X X X		
.....	<u>X X X</u>	X X X	
雜    損		<u>X X X</u>	
經常費用合計			<u>X X X</u>
經常収益			
運営費交付金収益		X X X	
授業料収益		X X X	
入学金収益		X X X	
検定料収益		X X X	
附属病院収益		X X X	
受託研究等収益		X X X	
受託事業等収益		X X X	
寄附金収益		X X X	
財務収益			
受取利息	X X X		
有価証券利息	X X X		
.....	<u>X X X</u>	X X X	
雜    益			
財産貸付料収入	X X X		
(何) 入場料収入	X X X		
物品受贈益	X X X		
.....	<u>X X X</u>	<u>X X X</u>	
經常収益合計			<u>X X X</u>
經常利益			X X X
臨時損失			
固定資産除却損		X X X	
減損損失		X X X	
災害損失		X X X	
.....		<u>X X X</u>	X X X
臨時利益			
固定資産売却益		X X X	
(何) 引当金戻入益		X X X	
.....		<u>X X X</u>	<u>X X X</u>
当期純利益			X X X
目的積立金取崩額			<u>X X X</u>

## 第7章 キャッシュ・フロー計算書

### 第63 表示区分

- 1 キャッシュ・フロー計算書には、業務活動によるキャッシュ・フロー、投資活動によるキャッシュ・フロー及び財務活動によるキャッシュ・フローの区分を設けなければならない。（注39）
- 2 業務活動によるキャッシュ・フローの区分には、投資活動及び財務活動以外の取引によるキャッシュ・フローを記載する。（注40）
- 3 投資活動によるキャッシュ・フローの区分には、固定資産の取得及び売却、投資資産の取得及び売却等によるキャッシュ・フローを記載する。（注41）
- 4 財務活動によるキャッシュ・フローの区分には、資金の調達及び返済によるキャッシュ・フローを記載する。（注42）
- 5 国庫納付に係るキャッシュ・フローは、業務活動によるキャッシュ・フローの区分に記載する。
- 6 利息に係るキャッシュ・フローについては、受取利息及び受取配当金は投資活動によるキャッシュ・フローの区分に記載し、支払利息は財務活動によるキャッシュ・フローの区分に記載する。（注43）

#### <注39> キャッシュ・フロー計算書の表示区分について

- 1 キャッシュ・フロー計算書においては、一会計期間におけるキャッシュ・フローを業務活動によるキャッシュ・フロー、投資活動によるキャッシュ・フロー及び財務活動によるキャッシュ・フローの三つに区分して表示する。
- 2 業務活動によるキャッシュ・フローの区分には、国立大学法人等の通常の業務の実施に係る資金の状態を表すため、教育研究の実施による収入、原材料、商品又はサービスの購入による支出等、投資活動及び財務活動以外の取引によるキャッシュ・フローを記載する。
- 3 国立大学法人等に対して国から交付される運営費交付金については、法人がその業務を行うことを前提に、そのための財源として交付される資金であり、損益計算においても法人の業務の遂行によって最終的に収益計上されるものであるため、その収入額を業務活動によるキャッシュ・フローの区分に表示する。
- 4 国又は地方公共団体から交付される補助金等については、国立大学法人等が行う業務の財源として交付される資金であり、損益計算書においても法人の業務の遂行によって最終的に収益計上されるものもあるため、その収入額を業務活動によるキャッシュ・フローの区分に表示する。
- 5 なお、教育研究の実施による収入等、業務活動に係る債権・債務から生ずるキャッシュ・フローは、業務活動によるキャッシュ・フローの区分に表示する。
- 6 投資活動によるキャッシュ・フローの区分には、固定資産の取得など、将来に向けた

運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の状態を表すため、国立大学法人等の通常の業務活動の実施の基礎となる固定資産の取得及び売却、投資資産の取得及び売却等によるキャッシュ・フローを記載する。

- 7 国立大学法人等に対して国又は独立行政法人国立大学財務・経営センターから交付される施設費については、その収入額を投資活動によるキャッシュ・フローの区分に表示する。
- 8 財務活動によるキャッシュ・フローの区分には、増減資による資金の収入・支出、債券の発行・償還及び借入れ・返済による収入・支出等、資金の調達及び返済によるキャッシュ・フローを記載する。
- 9 国立大学法人等の場合、準用通則法第47条で余裕金の運用先を安全資産に限ってはいるが、外部資金による資産運用等により利息収入等を見込めることから、利息の表示区分としては、損益の算定に含まれる受取利息及び受取配当金は投資活動によるキャッシュ・フローの区分に記載し、支払利息は財務活動によるキャッシュ・フローの区分に記載する。

#### <注40> 業務活動によるキャッシュ・フローの区分について

業務活動によるキャッシュ・フローの区分には、例えば、次のようなものが記載される。

- (1) 原材料、商品又はサービスの購入による支出
- (2) 人件費支出（教職員及び役員に対する報酬の支出）
- (3) その他の業務支出
- (4) 運営費交付金収入
- (5) 授業料収入、入学金収入、検定料収入、附属病院収入、受託研究等収入、受託事業等収入など教育研究の実施による収入
- (6) 補助金等収入
- (7) 補助金等の精算による返還金の支出
- (8) 寄附金収入（「第81 寄付金の会計処理」により資本剰余金として計上されるものを除く。）
- (9) 国庫納付金の支払額

#### <注41> 投資活動によるキャッシュ・フローの区分について

1 投資活動によるキャッシュ・フローの区分には、例えば、次のようなものが記載される。

- (1) 有価証券の取得による支出
- (2) 有価証券の売却による収入
- (3) 有形固定資産及び無形固定資産の取得による支出
- (4) 有形固定資産及び無形固定資産の売却による収入
- (5) 施設費による収入
- (6) 施設費の精算による返還金の支出
- (7) 国立大学財務・経営センターへの納付による支出

(8) 金銭出資による支出

(9) 利息及び配当金の受取額

2 ただし、国立大学法人等の通常の業務活動として実施される、出資及び貸付けによる支出等については、業務活動によるキャッシュ・フローの区分に記載される。

<注4 2> 財務活動によるキャッシュ・フローの区分について

財務活動によるキャッシュ・フローの区分には、例えば、次のようなものが記載される。

(1) 短期借入れによる収入

(2) 短期借入金の返済による支出

(3) 債券の発行による収入

(4) 債券の償還による支出

(5) 長期借入れによる収入

(6) 長期借入金の返済による支出

(7) 金銭出資の受入による収入

(8) 民間出えん金（「第8 1 寄附金の会計処理」により、資本剰余金に計上される寄附金に限る。）の受入による収入

(9) 利息の支払額

<注4 3> 利息の表示について

利息の受取額及び支払額は、総額で表示するものとする。

#### 第6 4 表示方法

1 業務活動によるキャッシュ・フローは、主要な取引ごとにキャッシュ・フローを総額表示する方法により表示しなければならない。

2 投資活動によるキャッシュ・フロー及び財務活動によるキャッシュ・フローは、主要な取引ごとにキャッシュ・フローを総額表示しなければならない。

3 資金に係る換算差額は、他と区別して表示する。

#### 第6 5 キャッシュ・フロー計算書の様式

キャッシュ・フロー計算書の標準的な様式は、次のとおりとする。

##### キャッシュ・フロー計算書

(平成〇〇年4月1日～平成〇〇年3月31日)

#### I 業務活動によるキャッシュ・フロー

原材料、商品又はサービスの購入による支出 - X X X

人件費支出 - X X X

その他の業務支出 - X X X

運営費交付金収入 X X X

	授業料収入	X X X
	入学金収入	X X X
	検定料収入	X X X
	附属病院収入	X X X
	受託研究等収入	X X X
	受託事業等収入	X X X
	.....	X X X
	補助金等収入	X X X
	補助金等の精算による返還金の支出	- X X X
	寄附金収入	<u>X X X</u>
	小計	X X X
	.....	X X X
	国庫納付金の支払額	- <u>X X X</u>
	業務活動によるキャッシュ・フロー	X X X
II	投資活動によるキャッシュ・フロー	
	有価証券の取得による支出	- X X X
	有価証券の売却による収入	X X X
	有形固定資産の取得による支出	- X X X
	有形固定資産及び無形固定資産の売却による収入	X X X
	施設費による収入	X X X
	施設費の精算による返還金の支出	- X X X
	国立大学財務・経営センターへの納付による支出	- X X X
	金銭出資による支出	- X X X
	.....	X X X
	小計	X X X
	利息及び配当金の受取額	<u>X X X</u>
	投資活動によるキャッシュ・フロー	X X X
III	財務活動によるキャッシュ・フロー	
	短期借入れによる収入	X X X
	短期借入金の返済による支出	- X X X
	国立大学法人等債の償還による支出	X X X
	国立大学法人等債の発行による収入	X X X
	長期借入金の返済による支出	- X X X
	金銭出資の受入による収入	X X X
	民間出えん金の受入による収入	X X X
	.....	<u>X X X</u>
	小計	X X X
	利息の支払額	- <u>X X X</u>

	財務活動によるキャッシュ・フロー	X X X
IV	資金に係る換算差額	X X X
V	資金増加額（又は減少額）	X X X
VI	資金期首残高	<u>X X X</u>
VII	資金期末残高	<u><u>X X X</u></u>

## 第66 注記事項

キャッシュ・フロー計算書については、次の事項を注記しなければならない。

- (1) 資金の期末残高の貸借対照表科目別の内訳
- (2) 重要な非資金取引（注44）
- (3) 各表示区分の記載内容を変更した場合には、その内容

### <注44> 重要な非資金取引について

キャッシュ・フロー計算書に注記すべき重要な非資金取引には、例えば、次のようなものがある。

- (1) 現物出資の受入れによる資産の取得
- (2) 資産の交換
- (3) ファイナンス・リースによる資産の取得
- (4) P F Iによる資産の取得

## 第8章 利益の処分又は損失の処理に関する書類

### 第67 表示区分

- 1 利益の処分に関する書類は、当期末処分利益と利益処分別に分けて表示しなければならない。中期目標の期間の最後の事業年度においては、積立金振替額も加えて表示しなければならない。
- 2 損失の処理に関する書類は、当期末処理損失、損失処理額及び次期繰越欠損金に分けて表示しなければならない。

### 第68 利益の処分に関する書類の科目

- 1 当期末処分利益は、前期繰越欠損金が存在するときは、当期総利益から前期繰越欠損金の額を差し引いて表示しなければならない。
- 2 利益処分別の区分には、積立金及び目的積立金を内容ごとに表示するものとする。

### 第69 損失の処理に関する書類の科目

- 1 当期末処理損失は、前期繰越欠損金が存在し、当期総損失を生じた場合は当期総損失に前期繰越欠損金を加えて表示し、前期繰越欠損金が存在し、その額よりも小さい当期

総利益を生じた場合は、前期繰越欠損金から当期総利益を差し引いて表示しなければならない。

- 2 損失処理額の区分には、当期末処理損失を埋めるための各積立金の取崩額を積立金ごとに表示しなければならない。
- 3 各積立金を取り崩しても当期末処理損失が埋まらないときは、その額は繰越欠損金として整理しなければならない。

#### 第70 準用通則法第44条第3項による承認の額

利益の処分に関する書類において、目的積立金として整理しようとするときは、「国立大学法人法第35条において準用する独立行政法人通則法第44項第3項により文部科学大臣の承認を受けた額」（承認前にあっては「国立大学法人法第35条において準用する独立行政法人通則法第44項第3項により文部科学大臣の承認を受けようとする額」）としてその総額を表示しなければならない。（参考）

#### <参考> 経営努力認定の考え方について

- 1 利益の処分に関する書類における「国立大学法人法第35条において準用する独立行政法人通則法第44項第3項により文部科学大臣の承認を受けた額」（承認前にあっては「国立大学法人法第35条において準用する独立行政法人通則法第44項第3項により文部科学大臣の承認を受けようとする額」）は、国立大学法人等の当該事業年度における経営努力により生じたとされる額である。
- 2 上記1の額の処分先としては、国立大学法人等自体の動機付け確保の観点から、文部科学大臣の承認を得て中期計画で定められることとなるが、国立大学法人等の公共性等の性質により、その処分内容についてはいかなるものであっても主務大臣の承認さえ得られれば認められるというものではなく、合理的な用途でなければならない。
- 3 「国立大学法人法第35条において準用する独立行政法人通則法第44項第3項により文部科学大臣の承認を受けた額」が、国立大学法人等の経営努力により生じたものであることについては、国立大学法人等が自らその根拠を示すものとする。
- 4 具体的には、以下の考え方によるものとする。
  - (1) 運営費交付金及び国又は地方公共団体からの補助金等に基づく収益以外の収益（「第24 国立大学法人等業務実施コスト」に定める、業務費用から控除すべき収入をいう。）から生じた利益については、経営努力により生じたものとする。
  - (2) 運営費交付金に基づく収益から生じた利益については、中期計画（年度計画）の記載内容に照らして、運営費交付金により行うべき業務を効率的に行ったために費用が減少した場合、その結果発生したものについては、原則として経営努力によるものとする。ただし、運営費交付金により行うべき業務を行わなかったために費用が減少したと認められる場合には、経営努力によらないものとする。

#### 第71 利益の処分に関する書類及び損失の処理に関する書類の様式

利益の処分に関する書類及び損失の処理に関する書類の標準的な様式は、次のとおりとする。

利益の処分に関する書類  
(平成〇〇年〇月〇日)

I	当期未処分利益			X X X
	当期総利益		X X X	
	前期繰越欠損金	X X X		
II	利益処分数額			
	積立金		X X X	
	国立大学法人法第35条において準用する 独立行政法人通則法第44項第3項により 文部科学大臣の承認を受けた額		X X X	
	(何) 積立金	X X X		
	.....	X X X		
	.....	<u>X X X</u>	<u>X X X</u>	<u>X X X</u>

損失の処理に関する書類  
(平成〇〇年〇月〇日)

I	当期未処理損失			X X X
	当期総損失	X X X		
	(当期総利益)		(X X X)	
	前期繰越欠損金	X X X		
II	損失処理額			
	(何) 積立金取崩額	X X X		
	.....	X X X		
	積立金取崩額	X X X		X X X
III	次期繰越欠損金			X X X

## 第9章 国立大学法人等業務実施コスト計算書

### 第72 表示区分

- 国立大学法人等業務実施コスト計算書は、コストの発生原因ごとに、業務費用、損益外減価償却相当額、損益外減損損失相当額、引当外賞与増加見積額、引当外退職給付増加見積額、機会費用及び国庫納付額に区分して表示しなければならない。



- 2 業務費用は、損益計算書における費用相当額を計上し、更にこれより運営費交付金に基づく収益及び国又は地方公共団体からの補助金等に基づく収益以外の収益を差し引いて業務費用を計上する。
- 3 機会費用は、国又は地方公共団体の財産の無償又は減額された使用料による貸借取引から生ずるものと、政府出資等から生ずるもの、国又は地方公共団体からの無利子又は通常よりも有利な条件による融資取引から生ずるものとを区別して表示する。
- 4 (控除) 国庫納付額は、業務費用に計上されている国庫納付額を控除項目として計上する。

### 第73 国立大学法人等業務実施コスト計算書の様式

国立大学法人等業務実施コスト計算書の標準的な様式は、次のとおりとする。

国立大学法人等業務実施コスト計算書  
(平成〇〇年4月1日～平成〇〇年3月31日)

I	業務費用		
	(1) 損益計算書上の費用		
	業務費	X X X	
	一般管理費	X X X	
	財務費用	<u>X X X</u>	X X X
	(2) (控除) 自己収入等		
	授業料収益	- X X X	
	入学料収益	- X X X	
	検定料収益	- X X X	
	附属病院収益	- X X X	
	受託研究等収益	- X X X	
	受託事業等収益	- X X X	
	寄附金収益	- X X X	
	. . .	- <u>X X X</u>	- <u>X X X</u>
	業務費用合計		X X X
II	損益外減価償却相当額		X X X
III	損益外減損損失相当額		X X X
<b>IV</b>	<b><u>引当外賞与増加見積額</u></b>		<b><u>X X X</u></b>
<b>Ⅴ</b>	<b><u>引当外退職給付増加見積額</u></b>		<b>X X X</b>

## ~~Ⅴ~~Ⅵ 機会費用

国又は地方公共団体の無償又は減額された使用料による貸借取引の機会費用	X X X	
政府出資の機会費用	X X X	
無利子又は通常よりも有利な条件による融資取引の機会費用	<u>X X X</u>	X X X

~~Ⅴ~~Ⅶ (控除) 国庫納付額 - X X X

~~Ⅴ~~Ⅷ 国立大学法人等業務実施コスト X X X

### 第74 注記事項

国立大学法人等業務実施コスト計算書には、次の事項を注記しなければならない。  
(注45)

- (1) 国又は地方公共団体の財産の無償又は減額された使用料による貸借取引の機会費用があるときは、その計算方法
- (2) 政府出資等の機会費用があるときは、計算に使用した利率
- (3) 政府又は地方公共団体からの無利子又は通常よりも有利な条件による融資取引の機会費用があるときは、計算に使用した利率

#### <注45> 機会費用計算の注記について

機会費用の計算に当たっては、一定の仮定計算を行うものとする。

- (1) 国又は地方公共団体の財産を無償又は減額された使用料による貸借取引の機会費用は、例えば近隣の地代や賃貸料等を参考に計算を行い、その計算方法を注記する。
- (2) 政府出資等の機会費用は、資本金のうち政府出資金に「第77 運営費交付金等の会計処理」、「第78 施設費の会計処理」及び「第79 補助金等の会計処理」による会計処理を行った結果資本剰余金に計上された額を加算し、「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」による損益外減価償却累計額（目的積立金を財源として取得した償却資産に係る損益外減価償却累計額を除く。）及び損益外減損失累計額を控除した政府出資等の純額に一定の利率を乗じて計算する。一定利率については、国債の利回り等を参考にしつつ、簡明な数値を用いることとし、その計算方法を注記する。
- (3) 政府又は地方公共団体からの無利子又は通常よりも有利な条件による融資取引の機会費用は、当該融資の各事業年度における平均残高に通常の調達利率と実際の融資利率との差の利率を乗じて計算することとし、その計算方法を注記する。

## 第10章 附属明細書及び注記

### 第75 附属明細書

国立大学法人等は、貸借対照表及び損益計算書等の内容を補足するため、次の事項を

明らかにした附属明細書を作成しなければならない。(注46)

- (1) 固定資産の取得及び処分、減価償却費(「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」による損益外減価償却相当額も含む。)並びに減損損失~~累計額~~の明細
- (2) たな卸資産の明細
- (3) 無償使用国有財産の明細
- (4) P F I の明細
- (5) 有価証券の明細
- (6) 出資金の明細
- (7) 長期貸付金の明細
- (8) 長期借入金の明細
- (9) 国立大学法人等債の明細
- (10) 引当金の明細
- (11) 保証債務の明細
- (12) 資本金及び資本剰余金の明細
- (13) 積立金等の明細及び目的積立金の取崩しの明細
- (14) 業務費及び一般管理費の明細
- (15) 運営費交付金債務及び運営費交付金収益の明細
- (16) 国等からの財源措置の明細
- (17) 役員及び教職員の給与の明細
- (18) 開示すべきセグメント情報
- (19) 寄附金の明細
- (20) 受託研究の明細
- (21) 共同研究の明細
- (22) 受託事業等の明細
- (23) 科学研究費補助金の明細
- (24) 上記以外の主な資産、負債、費用及び収益の明細

<注46> 附属明細書による開示について

- 1 セグメント情報との関係、国民に対する情報開示等の観点から、国立大学法人等が実施する業務の目的ごとに固定資産をグルーピングして表示することが適切な場合は、業務の目的ごとに固定資産の状況を明らかにしなければならない。
- 2 有価証券については、流動資産に計上した有価証券と投資有価証券を区分し、さらに売買目的有価証券、満期保有目的の債券、関係会社株式及びその他有価証券に区分して記載するほか、その他の関係会社有価証券を保有する場合は当該有価証券は区分して記載しなければならない。
- 3 長期貸付金については、関係法人長期貸付金とその他の貸付金に区分して記載しなければならない。
- 4 引当金の明細において、資産の控除項目として計上される引当金については、当該資産の総額との関係を明らかにしなければならない。

## 第76 注記

- 1 国立大学法人等の財務諸表には、重要な会計方針、重要な債務負担行為、その作成日までに発生した重要な後発事象、固有の表示科目の内容その他国立大学法人等の状況を適切に開示するために必要な会計情報を注記しなければならない。
- 2 重要な会計方針に係る注記事項は、まとめて記載するものとする。その他の注記事項についても、重要な会計方針の注記の次に記載することができる。(注47) (注48) (注49)

### <注47> 附属明細書及び注記における開示について

国立大学法人等の財務諸表は、広く国民にとってわかりやすい形で会計情報を開示するものでなければならないが、一方で、各種専門家にとって高度な分析に耐えられるような詳細な情報が含まれていなければならない。このため、貸借対照表や損益計算書等はいたずらに複雑なものとならないように留意しつつ、詳細な情報を附属明細書及び注記によって、開示していくものとする。

### <注48> 重要な会計方針の開示について

- 1 会計方針とは、国立大学法人等が財務諸表の作成に当たって、その会計情報を正しく示すために採用した会計処理の原則及び手続並びに表示の方法をいう。
- 2 会計方針の例としては次のようなものがある。
  - (1) 運営費交付金収益の計上基準
  - (2) 減価償却の会計処理方法
  - (3) 退職給付に係る引当金及び見積額の計上基準
  - (4) 有価証券の評価基準及び評価方法
  - (5) たな卸資産の評価基準及び評価方法
  - (6) ~~債券発行差金~~債券発行差額の償却基準
  - (7) 外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準
  - (8) 未収財源措置予定額の計上基準
  - (9) 国立大学法人等業務実施コスト計算書における機会費用の計上方法
- 3 なお、重要な会計方針を変更した場合には、次の各号に掲げる事項を前項による記載の次に記載しなければならない。
  - (1) 会計処理の原則又は手続を変更した場合には、その旨、変更の理由及び当該変更が財務諸表に与えている影響の内容
  - (2) 表示方法を変更した場合には、その内容

### <注49> 重要な後発事象の開示について

- 1 財務諸表には、その作成日までに発生した重要な後発事象を注記しなければならない。後発事象とは、貸借対照表日以降に発生した事象で、次期以降の財政状態及び運営状況に影響を及ぼすものをいう。重要な後発事象を注記事項として開示することは、当該国立大学法人等の将来の財政状態や運営状況を理解するための補足情報として有用である。

2 重要な後発事象の例としては、次のようなものがある。

- (1) 主要な業務の改廃
- (2) 中期計画の変更
- (3) 国からの財源措置の重大な変更
- (4) 火災、出水等による重大な損害の発生

## 第11章 国立大学法人等固有の会計処理

### 第77 運営費交付金等の会計処理

- 1 国立大学法人等が運営費交付金を受領したときは、相当額を運営費交付金債務として整理するものとする。運営費交付金債務は、流動負債に属するものとする。また、当該年度に係る授業料を受領したときは授業料債務として、運営費交付金債務同様に整理する。
- 2 運営費交付金債務及び授業料債務は、中期目標の期間中は原則として業務の進行が期間の進行に対応するものとして収益化を行うものとする。なお、他の方法により収益化することがより適当であると認められる場合には、当該方法により収益化することができる。
- 3 運営費交付金債務は、次の中期目標の期間に繰り越すことはできず、中期目標の期間の最後の事業年度の期末処理において、これを全額収益に振り替えなければならない。
- 4 国立大学法人等が固定資産を取得した際、その取得額のうち運営費交付金又は授業料に対応する額については、次のように処理するものとする。
  - (1) 取得固定資産が運営費交付金又は当該年度に係る授業料により支出されたと合理的に特定できる場合においては、
    - ア 当該資産が非償却資産であって、その取得が中期計画の想定範囲内であるときに限り、その金額を運営費交付金債務又は授業料債務から資本剰余金に振り替える。
    - イ 当該資産が非償却資産であってアに該当しないとき又は当該資産が償却資産若しくは重要性が認められるたな卸資産（通常の業務活動の過程において販売するために保有するものを除く。以下この項において同じ。）であるときは、その金額を運営費交付金債務又は授業料債務から別の負債項目である資産見返運営費交付金等に振り替える。資産見返運営費交付金等は、償却資産の場合は毎事業年度、減価償却相当額を、たな卸資産の場合は消費した際に、それぞれ取り崩して、資産見返運営費交付金等戻入として収益に振り替える。
  - (2) 取得固定資産等が運営費交付金又は当該年度に係る授業料により支出されたと合理的に特定できない場合においては、相当とする金額を運営費交付金債務又は授業料債務から収益に振り替える。（注50）

#### <注50> 運営費交付金等の会計処理について

- 1 運営費交付金は国立大学法人等に対して国から負託された業務の財源であり、交付金の交付をもって直ちに収益と認識することは適当ではない。したがって、交付された運

営費交付金は相当額を運営費交付金債務として負債に計上し、業務の進行に応じて収益化を行うものとする。授業料については、学生から負託された教育の経済資源であり、一定の負債性が認められることから、会計処理上運営費交付金と同様の取扱いをする。

2 運営費交付金及び授業料の収益化については、具体的には以下の考え方によるものとする。

(1) 国立大学法人等における教育研究という業務の実施に関しては、一般に進行度の客観的な測定が困難であるため、中期計画及びこれを具体化する年度計画等において、業務の実施と運営費交付金及び授業料財源とが期間的に対応しているものとして、一定の期間の経過を業務の進行とみなし、運営費交付金及び授業料債務を収益化することを原則とする。

なお、運営費交付金については、中期計画及びこれを具体化する年度計画等において、一定の業務等との対応関係が明らかにされている場合には、当該業務等の達成度に応じて、財源として予定されていた運営費交付金債務を収益化を進行させることができる。例えば、一定のプロジェクトの実施（未了のプロジェクトについて投入費用に対応して業務の達成度を測定する方法を含む。）や、財源措置上、交付金財源との対応関係が明らかにされている場合等がこれに該当する。

(2) 運営費交付金が既に実施された業務の財源を補てんするために交付されたことが明らかといえる場合においては、交付時において収益計上するものとする。

3 中期目標の期間の終了時点においては、期間中に交付された運営費交付金を精算するものとする。

このため、中期目標の期間の最後の事業年度においては、当該事業年度の業務の進行に応じて交付金を収益化し、なお、運営費交付金債務が残る場合には、当該残額は、別途、精算のための収益化を行うものとする。

4 運営費交付金の収益化に関する会計方針については、適切な開示を行わなければならない。

5 長期の契約により固定資産を取得する場合であって、当該契約に基づき前払金又は部分払金を支払うときは、当該支出額が運営費交付金により支出されたと合理的に特定できる場合には、その金額を運営費交付金債務から建設仮勘定見返運営費交付金に振り替え、現実に引渡しを受けたときに建設仮勘定見返運営費交付金を本来の科目（資本剰余金又は資産見返運営費交付金）に振り替えるものとする。

6 資産見返運営費交付金等を計上している固定資産を売却、交換又は除去した場合には、これを全額収益に振り替えるものとする。

## 第78 施設費の会計処理

1 国立大学法人等が国又は独立行政法人国立大学財務・経営センターから施設費を受領したときは、相当額を預り施設費として整理するものとする。預り施設費は、流動負債に属するものとする。預り施設費は、拠出者毎に区分して表示する。

2 施設費によって固定資産を取得した場合は、当該資産が非償却資産であるとき又は当該資産の減価償却について「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」に定める処理が行われることとされたときは、当該固定資産の取得費に相当する額を、預り施設

費から資本剰余金に振り替えなければならない。(注5 1)

<注5 1> 施設費を財源に固定資産を取得した場合の会計処理について

- 1 国立大学法人等における施設費は、国又は独立行政法人国立大学財務・経営センターから拠出された対象資産の取得を行うまでは、その用途が特定された財源として、預り施設費として負債に整理する。
- 2 施設費を財源とする償却資産については、通常、「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」にしたがって減価償却の処理を行うことが想定される。そのような場合には、当該資産の購入時において、預り施設費を資本剰余金に振り替えることとし、国立大学法人等の財産的基礎を構成するものとする。資本剰余金は、「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」の規定により、減価償却の進行に応じて実質的に減価していくこととなる。
- 3 長期の契約により固定資産を取得する場合であって、当該契約に基づき前払金又は部分払金を支払うときは、その金額を預り施設費から建設仮勘定見返施設費に振り替え、現実に引渡しを受けたときに建設仮勘定見返施設費を資本剰余金に振り替えるものとする。

第79 補助金等の会計処理

- 1 国立大学法人等が国又は地方公共団体から補助金等の概算交付を受けたときは、相当額を預り補助金等として整理するものとする。預り補助金等は流動負債に属するものとする。
- 2 預り補助金等は、補助金等の交付の目的に従った業務の進行に応じて収益化を行うものとする。
- 3 補助金等を財源の全部又は一部として固定資産等を取得したときは、次のように処理するものとする。(注5 2)
  - (1) 当該資産が非償却資産であるときは、取得に充てられた補助金等の金額を預り補助金等から資本剰余金に振り替える。
  - (2) 当該資産が償却資産であるときは、取得に充てられた補助金等の金額を預り補助金等から資産見返補助金等に振り替える。資産見返補助金等は、毎事業年度、当該資産の減価償却額に取得価額に占める補助金等の割合を乗じて算定した額を取り崩して、資産見返補助金等戻入として収益に振り替える。

<注5 2> 補助金等の会計処理について

- 1 補助金等が既の実施された業務の財源を補てんするために精算交付された場合においては、補助金等の交付を受けたときに収益計上するものとする。
- 2 長期の契約により固定資産を取得する場合であって、当該契約に基づき前払金又は部分払金を支払うときは、その金額を預り補助金等から建設仮勘定見返補助金等に振り替え、現実に引渡しを受けたときに建設仮勘定見返補助金等を本来の科目(資本剰余金又は資産見返補助金等)に振り替えるものとする。また、当該固定資産が償却資産の場合には毎事業年度、減価償却相当額を取り崩して、資産見返補助金等戻入として収益に振り

替える。

- 3 資産見返補助金等を計上している固定資産を売却、交換又は除却した場合には、これを全額収益に振り替えるものとする。

#### 第80 事後に財源措置が行われる特定の費用に係る会計処理

- 1 国立大学法人等の業務運営に要する費用のうち、その発生額を後年度において財源措置することとされている特定の費用が発生したときは、財源措置が予定される金額を財源措置予定額収益の科目により収益に計上するとともに、未収財源措置予定額の科目により資産として計上する。
- 2 後年度において財源措置することとされている特定の費用は、国立大学法人等が負担した特定の費用について、事後に財源措置を行うこと及び財源措置を行う費用の範囲、時期、方法等が、例えば中期計画等で明らかにされていなければならない。(注53)
- 3 なお、財源措置予定額収益は、国立大学法人等業務実施コスト計算書に計上される業務費用から控除すべき収益には含まれない。

#### <注53> 財源措置予定額収益の計上が認められる場合について

財源措置予定額収益の計上が認められるのは、運営費交付金等による事前の財源措置を困難とする合理的な理由がある場合に限られる。

#### 第81 寄附金の会計処理

- 1 国立大学法人等が受領した寄附金については、次により処理するものとする。(注54)
  - (1) 中期計画等において、国立大学法人等の財産的基礎に充てる目的で民間からの出えんを募ることを明らかにしている場合であって、当該計画に従って出えんを募った場合には、民間出えん金の科目により資本剰余金として計上する。
  - (2) 寄附者がその用途を特定した場合又は寄附者が用途を特定していても国立大学法人等が使用に先立ってあらかじめ計画的に用途を特定した場合において、寄附金を受領した時点では寄附金債務として負債に計上し、当該用途に充てるための費用が発生した時点で当該費用に相当する額を寄附金債務から収益に振り替えなければならない。
- 2 1(2)の寄附金によって固定資産を取得した場合は、次のように処理するものとする。
  - (1) 当該資産が非償却資産であって、その取得が中期計画の想定範囲内であるときに限り、その金額を寄附金債務から資本剰余金に振り替える。
  - (2) 当該資産が非償却資産であって、(1)に該当しないとき及び当該資産が償却資産であるときは、その金額を寄附金債務から別の負債項目である資産見返寄附金に振り替える。償却資産の場合は毎事業年度、減価償却相当額を取り崩して、資産見返寄附金戻入として収益に振り替える。(注55)
- 3 1(1)又は(2)のいずれにも該当しない寄附金については、当該寄附金に相当する額を受領した期の収益として計上する。



#### <注54> 寄附金の負債計上について

国立大学法人等においては、その性格上、様々な趣旨の寄附金を受けることが想定される。寄附金は、寄附者が国立大学法人等の業務の実施を財産的に支援する目的で出せるものであるが、寄附者があらかじめその用途を特定したり、あるいは国立大学法人等の側で用途を示して計画的に管理支出することが想定され、国立大学法人等が通常はこれを何らかの特定の業務のための支出に計画的に充てなければならないという責務を負っているものと考えられる。このため、受領した寄附金の会計的な性格として、あらかじめ用途が特定されて管理されている寄附金に関しては、その未使用額と同額の負債の存在を認め、受領した期の終了後も引き続き国立大学法人等に留保することとしている。これは、中期計画期間の終了時においても同様であり、運営費交付金とは異なり、精算のための収益化は不要である。

#### <注55> 寄附金を財源として固定資産を取得した場合の会計処理について

- 1 国立大学法人等が用途を特定した寄附金によって非償却資産を取得した場合においては、これが中期計画の想定範囲内である場合には、国立大学法人等の財産的基礎を構成するものと考えられることから、資本剰余金に振り替えるものとする。
- 2 資産見返寄附金を計上している固定資産を売却、交換又は除去した場合は、これを全額収益に振り替えるものとする。

### 第82 教育研究の実施等による収益の会計処理

国立大学法人等がその教育研究の実施等に伴い得た収入については、その実施によって実現したもののみを、各期の収益として計上する。(注56)

#### <注56> 国又は地方公共団体からの委託費の扱いについて

国立大学法人等に対して国又は地方公共団体から支出された委託費については、国立大学法人等の教育研究の提供等の対価に該当するものであるため、他の主体からの受託収入と同様の会計処理を行う。ただし、国又は地方公共団体からの受託による収益と他の主体からの受託による収益とは区別して表示しなければならない。

### 第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理

国立大学法人等が保有する償却資産のうち、その減価に対応すべき収益の獲得が予定されないものとして特定された資産については、当該資産の減価償却相当額は、損益計算上の費用には計上せず、資本剰余金を減額することとする。(注57)

#### <注57> 減価償却の会計処理について

- 1 国立大学法人等が固定資産を取得するに当たっては、国は、国有財産の現物出資あるいは施設費の交付等を行うことができるものとされている。ところで、国立大学法人等は業務運営の財源を主に運営費交付金に依存することになるが、このような資産の減価部分については通常は運営費交付金の算定対象とはならず、また、運営費交付金に基づく収益以外の収益によって充当することも必ずしも予定されていない。更に資産の更新

に当たっては、出資者たる国により改めて必要な措置が講じられることになるものと想定される。このような場合においては、減価償却に相当する額は、むしろ実質的には資本の価値財産的基礎の減少と考えるべきであることから、損益計算上の費用には計上せず、国立大学法人等の資本剰余金を直接に減額することによって処理するものとする。この取扱いは、取得時までには別途特定された資産に限り行うものとする。

- 2 このような資産に係る減価償却相当額は、各期間に対応させるべき収益が存在するものではなく、また、国立大学法人等の運営責任という観点からも、その範囲外にあると考えることができる。これを損益計算上の費用としてとらえることは、国立大学法人等の運営状況の測定を誤らせることとなり、準用通則法44条を適用する上での計算方法として適当ではない。
- 3 貸借対照表の資本剰余金の区分においては、「第83 特定の償却資産の減価に係る会計処理」の規定に基づく損益外減価償却相当額の累計額を表示しなければならない。この累計額は、国立大学法人等の実質的な財産的基礎の減少の程度を表示し、当該資産の更新に係る情報提供の機能を果たすこととなる。
- 1 附属病院における一定の償却資産に係る減価償却については、当該減価に対応すべき附属病院収入の獲得が予定されていると考えられるため、当該収入をもって充当することが適当と考える。よって、附属病院における上記資産の減価償却相当額は、損益計算上の費用に計上し、それ以外については損益外減価償却を行うこととする。

#### 第84 賞与引当金に係る会計処理

- 1 賞与のうち、運営費交付金に基づく収益以外の収益によってその支払財源が手当されることが予定されている部分については、「第17 引当金」により賞与引当金を計上する。
- 2 賞与に充てるべき財源措置が翌期以降の運営費交付金により行なわれることが、中期計画等で明らかにされている場合には賞与引当金は計上しない。なお、この場合において、当期の運営費交付金により財源措置が手当されない引当外賞与見積額を貸借対照表の注記において表示するとともに、引当外賞与増加見積額を国立大学法人等業務実施コスト計算書に表示する。

#### ~~第84~~ 85 退職給付に係る会計処理

- 1 退職給付債務のうち、運営費交付金に基づく収益以外の収益によってその支払財源が手当されることが予定されている部分については、「第35 退職給付引当金の計上方法」により退職給付引当金を計上する。
- 2 退職給付債務について、次の要件に該当する場合には退職給付引当金は計上しない。なお、その場合は次の要件に合致しない場合に計上したであろう退職給付引当金の見積額を貸借対照表の注記において表示するとともに、退職給付債務に係る毎事業年度の増加額は国立大学法人等業務実施コスト計算書に表示する。
  - (1) 退職一時金（役員及び教職員の退職時に支払われる退職手当をいう。）については、退職一時金に充てるべき財源措置が運営費交付金により行われることが、例えば中期計画等で明らかにされている場合

- (2) 年金債務のうち厚生年金基金から支給される年金給付については、厚生年金基金に払い込むべき掛金に充てるべき財源措置が運営費交付金によって行われること、及び厚生年金基金に積立不足がある場合には、当該積立不足額とその解消のために必要となる財源措置が運営費交付金によって行われることが、例えば中期計画等で明らかにされている場合
- 3 国立大学法人等が中期計画等で想定した運営を行わなかったことにより将来の追加的な退職給付債務が発生した場合には、当期において負担すべき追加的費用を追加退職給付引当金に繰り入れ、貸借対照表の固定負債の部に表示するものとする。なお、その場合において、当該年度中に追加的な退職一時金が支給されているときには、当該追加分を当期の損益に反映させるものとする。
- 4 2の見積額のうち、退職一時金に係る退職給付債務の見積額の計算に当たっては、退職一時金の期末要支給額を用いた計算によることができる。

#### 第~~8-5~~8.6 退職共済年金に係る共済組合への負担金の会計処理

退職共済年金に係る共済組合への負担金は、拠出時に費用として認識するものとし、特別の引当金は計上しない。

#### 第8.7 債券発行差額の会計処理

- 1 国立大学法人等が事業資金等の調達のために債券を発行する場合には、債券の額面金額をもって貸借対照表価額とする。
- 2 債券の額面金額と異なる金額で発行したときは、当該額面額と異なる金額は、収入金額と額面金額との差額を債券発行差額として貸借対照表に表示するものとする。
- 3 債券発行差額は、毎事業年度、債券の償還期間にわたり合理的な基準で計算した額を償却しなければならない。期限前に債券を償還した場合には、債券発行差額の未償却残高のうち、償還した債券に対応する部分を当該事業年度に償却するものとする。

#### 第~~8-6~~8.8 毎事業年度の利益処分

- 1 当期末処分利益は、毎事業年度、積立金として整理するもののほか、中期目標の期間の最後の事業年度を除く毎事業年度、目的積立金として整理するものとする。
- 2 当期末処理損失は、毎事業年度、積立金（目的積立金が残っている場合は当該目的積立金を含む。）を減額して整理し、なお不足がある場合は繰越欠損金として整理するものとする。

#### 第~~8-7~~8.9 中期目標の期間の最後の事業年度の利益処分

国立大学法人等の中期目標の期間の最後の事業年度においては、当期末処分利益は、積立金として整理しなければならない。目的積立金及び国立大学法人法の規定に基づく前中期目標期間繰越積立金が残っている場合は、積立金に振り替えなければならない。  
(注58)

<注58> 中期目標の期間の最後の事業年度の利益処分について

1 国立大学法人制度においては、中期目標による運営・評価のシステムが導入されており、運営費交付金のルール設定等財務関係においても一の中期目標及びそれに基づく中期計画の期間を一つの区切りとしているところである。

国立大学法人等においては、運営費交付金等をこの中期目標の期間の終了時に精算するという考え方にたっていることから、最終年度に損益計算上の利益が生じた場合であっても準用通則法第44条第3項の処理は行わないほか、目的積立金や前中期目標期間繰越積立金が使用されずに残っていた場合は、中期目標の期間の最後の事業年度の利益処分時において、積立金に振り替えることを要するものである。

2 国立大学法人法においては、積立金を次の中期目標の期間に繰り越す旨の規定が設けられているが、利益の処分又は損失の処理に関する書類のほか、国庫納付金の計算書の作成を要する。当該計算書においては、中期目標の期間の最後の事業年度に係る利益処分を行った後の積立金の総額並びにその処分先である国庫納付金の額及び前中期目標期間繰越積立金として次の中期目標の期間に繰り越される金額を記載するものとする。

#### ~~第890~~ 目的積立金を取り崩す場合の会計処理

目的積立金について、中期計画であらかじめ定めた「剰余金の使途」に沿った費用が発生したときは、その同額を取り崩して目的積立金取崩額に振り替えなければならない。また、「剰余金の使途」に沿って固定資産を取得した場合、その取得に要した額を取り崩して資本剰余金に振り替えなければならない。

## 第12章 連結財務諸表

### 第1節 連結財務諸表の作成目的及び一般原則

#### ~~第891~~ 連結財務諸表の作成目的

連結財務諸表は、国立大学法人等とその出資先の会社等（以下「関係法人」という。）を公的な資金が供給されている一つの会計主体として捉え、国立大学法人等が関係法人集団（国立大学法人等及び関係法人の集団をいう。以下同じ。）の財政状態及び運営状況を総合的に報告するために作成するものである。（注59）

#### <注59> 連結財務諸表の作成目的及び性格について

1 国立大学法人等が行う出資等は、法人の設立目的を達成するために業務として行われるものであり、国立大学法人等と関係法人の間に必ずしも支配従属関係が認められるわけではないが、国立大学法人等と関係法人を公的な資金が供給されている一つの会計主体とみなして、公的な主体としての説明責任を果たす観点から、連結財務諸表の作成、開示を行うものである。

2 このような観点から作成される連結財務諸表は、公的な資金がどのように使用されているかを示すことを主たる目的としており、国立大学法人等の評価は、個別財務諸表により行われる必要がある。

3 関係法人には、国立大学法人等が出資を行っている民間企業のほか、法人と一定の関

係を有する公益法人等が含まれる。

## 第~~9-0~~9.2 連結財務諸表一般原則

- 1 連結財務諸表は、関係法人集団の財政状態及び運営状況に関して真実な報告を提供するものでなければならない。
- 2 連結財務諸表は、関係法人集団に属する国立大学法人等及び関係法人が準拠すべき一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して作成された個別財務諸表を基礎として作成されなければならない。
- 3 国立大学法人等の会計は、連結財務諸表によって、国民その他の利害関係者に対し必要な会計情報を明瞭に表示し、関係法人集団の状況に関する判断を誤らせないようにしなければならない。（注60）
- 4 連結財務諸表作成のために採用した基準及び手続は、每期継続して適用し、みだりにこれを変更してはならない。

### <注60> 重要性の原則の適用について

- 1 連結財務諸表を作成するに当たっては、国民その他の利害関係者の関係法人集団の状況に関する判断を誤らせないようにするため、金額的側面及び質的側面の両面からの重要性を勘案して、適切な会計処理及び表示を行わなければならない。
- 2 なお、連結財務諸表は、関係法人集団の財政状態及び運営状況を国民その他の利害関係者に総合的に報告するために作成するものであることから、その判断を誤らせない限り、連結の範囲、特定関連会社の決算日が連結決算日と異なる場合の仮決算の手続、連結のための個別財務諸表の修正、特定関連会社の資産及び負債の評価、未実現利益の消去、連結財務諸表の表示等に関して重要性の乏しいものについては、本来の会計処理によらないで合理的な範囲で他の簡便な方法によることも認められる。

## 第~~9-1~~9.3 連結の範囲

- 1 国立大学法人等は、原則としてすべての特定関連会社を連結の範囲に含めなければならない。（注61）
- 2 特定関連会社とは、国立大学法人等が出資する会社であって、次のいずれかに該当する場合には、当該会社は特定関連会社に該当するものとする。
  - (1) 会社の議決権の過半数を所有しているという事実が認められる場合
  - (2) 会社に対する議決権の所有割合が100分の50以下であっても、高い比率の議決権を保有している場合であって、次のような事実が認められる場合
    - ア 議決権を行使しない株主が存在することにより、株主総会において議決権の過半数を継続的に占めることができると認められるとき。
    - イ 役員、関連会社等の協力的な株主の存在により、株主総会において議決権の過半数を継続的に占めることができると認められるとき。
    - ウ 役員若しくは教職員である者又はこれらであった者が、取締役会の構成員の過半数を継続的に占めているとき。
  - エ 重要な財務及び営業の方針決定に関し国立大学法人等の承認を要する契約等が存在

するとき。

- 3 国立大学法人等及び特定関連会社が、他の会社に出資又は投資を行い、多大な影響力を与えていると認められる場合における当該他の会社も、また、特定関連会社とみなすものとする。

#### <注6 1> 連結の範囲からの除外について

特定関連会社であって、その資産、収益等を考慮して、連結の範囲から除いても関係法人集団の財政状態、運営状況及び公的資金の使用状況等に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいものは、連結の範囲に含めないことができる。

#### 第~~9-2~~9 4 連結決算日

- 1 連結財務諸表の作成に関する期間は一年とし、国立大学法人等の会計期間に基づき、毎年3月31日をもって連結決算日とする。
- 2 特定関連会社の決算日が連結決算日と異なる場合には、特定関連会社は、連結決算日に正規の決算に準ずる合理的な手続により決算を行わなければならない。（注6 2）

#### <注6 2> 決算日に差異がある場合の取扱いについて

決算日の差異が三か月を超えない場合には、特定関連会社の正規の決算を基礎として、連結決算を行うことができる。ただし、この場合には、決算日が異なることから生ずる国立大学法人等及び連結される特定関連会社間の取引に係る会計記録の重要な不一致について、必要な整理を行うものとする。

#### 第~~9-3~~9 5 会計処理の原則及び手続

- 1 同一環境下で行われた同一の性質の取引等について、国立大学法人等及び特定関連会社が採用する会計処理の原則及び手続は、「第11章 国立大学法人等固有の会計処理」に定めるものを除き、原則として国立大学法人等の会計処理に統一しなければならない。（注6 3）
- 2 会計処理の原則及び手続で国立大学法人等及び特定関連会社との間で特に異なるものがあるときは、その概要を注記しなければならない。

#### <注6 3> 会計処理の統一について

- 1 資産の評価方法及び固定資産の減価償却の方法についても、本来統一することが望ましいが、事務処理に多大の時間と労力を要するため、統一が困難な場合には、統一をしないことができる。
- 2 特定関連会社に対する国立大学法人等の出資が、当該特定関連会社が行う研究開発事業等に要する資金の供給として他の民間会社と共同して実施される場合であって、当該特定関連会社が、当該他の民間会社の持分法適用会社に該当するため、当該特定関連会社の会計処理が当該他の民間会社の会計処理に統一されており、国立大学法人等の会計処理に統一することが困難な場合等合理的理由がある場合には、関係法人集団の財政状態及び運営状況に関する国民その他の利害関係者の判断を誤らせない限りにおいて、会

計処理の統一を行わないことができる。

3 上記の場合においては、会計処理の統一が困難な理由、統一されていない会計処理の概要を注記しなければならない。

#### 第~~9-4~~9-6 連結財務諸表の体系

国立大学法人等の連結財務諸表は、次のとおりとする。

- (1) 連結貸借対照表
- (2) 連結損益計算書
- (3) 連結キャッシュ・フロー計算書
- (4) 連結剰余金計算書
- (5) 連結附属明細書

### 第2節 連結貸借対照表の作成基準

#### 第~~9-5~~9-7 連結貸借対照表作成の基本原則

連結貸借対照表は、国立大学法人等及び特定関連会社の個別貸借対照表における資産、負債及び資本純資産の金額を基礎とし、特定関連会社の資産及び負債の評価、~~国立大学法人等及び並びに~~連結される特定関連会社（以下「連結法人」という。）~~相互間の出資と資本及び債権と債務の相殺消去等の処理を行って作成する。~~に対する出資とこれに対応する当該連結法人の資本との相殺消去その他必要とされる国立大学法人等及び連結法人相互間の項目を消去して作成する。

#### 第~~9-6~~9-8 特定関連会社の資産及び負債の評価

- 1 連結貸借対照表の作成に当たっては、特定関連会社に該当することとなった日において、特定関連会社の資産及び負債のすべてを、特定関連会社に該当することとなった日の時価により評価しなければならない。（注6 4）
- 2 特定関連会社の資産及び負債の時価による評価額と当該資産及び負債の個別貸借対照表上の金額との差額は、特定関連会社の資本純資産とする。

<注6 4> 特定関連会社に該当することとなった日が、特定関連会社の決算日以外の日である場合の取扱いについて

特定関連会社に該当することとなった日が特定関連会社の決算日以外の日であるときは、当該目の前後いずれか近い決算日において特定関連会社に該当することとなったものとみなして処理することができる。

#### 第~~9-7~~9-9 出資と資本の相殺消去

- 1 国立大学法人等の特定関連会社に対する出資とこれに対応する特定関連会社の資本は、相殺消去しなければならない。
- 2 国立大学法人等の特定関連会社に対する出資とこれに対応する特定関連会社の資本との相殺消去に当たり、差額が生ずる場合には、当該差額は発生した事業年度の損益として処理しなければならない。

- 3 特定関連会社相互間の投資とこれに対応する資本とは、国立大学法人等の特定関連会社に対する出資とこれに対応する特定関連会社の資本との相殺消去に準じて相殺消去しなければならない。

#### 第~~9-8~~100 少数株主持分

- 1 特定関連会社の~~資本~~純資産のうち国立大学法人等に帰属しない部分は、少数株主持分とする。
- 2 特定関連会社の欠損のうち、当該特定関連会社に係る少数株主持分に割り当てられる額が、当該少数株主の負担すべき額を超える場合には、当該超過額については、当該特定関連会社との関係を勘案して処理するものとする。（注65）

<注65> 特定関連会社の欠損が当該特定関連会社に係る少数株主持分に割り当てられるべき額を超える場合の処理について

- 1 例えば、特定関連会社に対する国立大学法人等の出資が、当該特定関連会社が行う研究開発事業等に要する資金の供給として他の民間会社と共同して実施される場合等であって、特定関連会社の欠損金について国立大学法人等と当該他の民間会社が出資割合に応じて負担することが合理的な場合には、次のように処理することが考えられる。
  - (1) 国立大学法人等が当該特定関連会社の債務保証を行っている等、契約等による義務を負っている場合には、特定関連会社の欠損のうち、当該特定関連会社に係る少数株主の負担すべき額を超える額（以下「少数株主持分超過欠損額」という。）のうち、国立大学法人等が負担すべき義務の金額の範囲内で国立大学法人等の持分に負担させる。
  - (2) 国立大学法人等が契約等による義務を負っていない場合の少数株主持分超過欠損額及び少数株主持分超過欠損額が契約等により国立大学法人等が負担すべき義務の金額を超える場合の当該超過欠損額は、少数株主持分に割当てするものとする。
- 2 上記1(1)の場合において、その後特定関連会社に利益が計上されたときは、国立大学法人等が負担した欠損が回収されるまで、その利益の金額を国立大学法人等の持分に加算するものとする。

#### 第~~9-9~~101 債権と債務の相殺消去

- 1 連結法人相互間の債権と債務とは、相殺消去しなければならない。
- 2 連結法人相互間での債務保証に関し計上されている保証債務損失引当金は、その全額を消去しなければならない。

#### 第~~10-0~~102 法人税等の期間配分に係る会計処理

- 1 連結法人の法人税等については、一時差異等に係る税金の額を期間配分しなければならない。
- 2 一時差異等に係る税金の額は、独立行政法人会計基準「第35 法人税等の期間配分に係る会計処理」に準じ、繰延税金資産又は繰延税金負債として計上しなければならない。



### 第~~101~~103 関連会社等に対する持分法の適用

- 1 連結の範囲に含めない特定関連会社及び関連会社に対する出資については、原則として持分法を適用しなければならない。(注66)
- 2 関連会社とは、国立大学法人等及び特定関連会社が、出資、人事、資金、技術、取引等の関係を通じて、特定関連会社以外の会社の財務及び営業の方針決定に対して重要な影響を与えることができる場合における当該会社をいう。
- 3 次の場合には、特定関連会社以外の会社の財務及び事業運営の方針決定に重要な影響を与えることができないことが明らかに示されない限り、当該会社は関連会社に該当するものとする。
  - (1) 特定関連会社以外の会社の議決権の100分の20以上を実質的に所有している場合
  - (2) 会社に対する議決権の所有割合が100分の20未満であっても、一定の議決権を有しており、かつ、次のような事実が認められる場合
    - ア 国立大学法人等の役員若しくは教職員である者又はこれらであった者(国立大学法人等の設立に際し、権利義務を承継した国立大学等の教職員であった者を含む。)であって、財務及び営業又は事業の方針決定に関して影響を与えることができる者が、代表取締役又はこれに準ずる役職に就任している場合
    - イ 国立大学法人等が、重要な融資(債務保証又は担保の提供を含む。)を行っている場合
    - ウ 国立大学法人等が、重要な技術を提供している場合
    - エ 国立大学法人等との間に、重要な販売、仕入その他の営業上又は事業上の取引がある場合
    - オ 国立大学法人等が、財務及び営業又は事業の方針決定に対して重要な影響を与えることができることが推測される事実が存在する場合
- 4 関連会社株式の売却等により当該会社が関連会社に該当しなくなった場合には、残存する当該会社の株式は、個別貸借対照表上の帳簿価額をもって評価する。なお、特定関連会社株式の売却等により当該会社が特定関連会社及び関連会社に該当しなくなった場合には、上記に準じて処理する。

#### <注66> 持分法適用の範囲からの除外について

持分法の適用により、連結財務諸表に重要な影響を与えない場合には、持分法の適用会社としないことができる。

### 第~~102~~104 表示区分

- 1 連結貸借対照表は、資産の部、負債の部、~~少数株主持分及び資本~~純資産の部に区分するものとする。

資産の部は、流動資産、固定資産及び繰延資産に区分し、固定資産は、有形固定資産、無形固定資産及び投資その他の資産に区分して記載するものとする。負債の部は、流動負債及び固定負債に区分して記載するものとする。

~~少数株主持分は、負債の部の次に区分して記載するものとする。~~

資本純資産の部は、資本金、資本剰余金、連結剰余金に区分して記載するものとする。

- 2 流動資産、有形固定資産、無形固定資産、投資その他の資産、繰延資産、流動負債及び固定負債は、一定の基準に従い、その性質を示す適切な名称を付した科目に明瞭に分類して記載するものとする。（注67）

<注67> 繰延資産について

~~1~~ 「第8 資産の定義」により、国立大学法人等においては、繰延資産を計上してはならないことにされており、連結貸借対照表に計上される繰延資産は、特定関連会社の貸借対照表に計上されている繰延資産に限られる。

~~2~~ ~~特定関連会社の貸借対照表に社債発行差金が繰延資産として計上されているときは、当該社債発行差金は、投資その他の資産として連結貸借対照表に計上するものとする。~~

### 第3節 連結損益計算書の作成基準

#### 第~~103~~105 連結損益計算書作成の基本原則

連結損益計算書は、国立大学法人等及び特定関連会社の個別損益計算書における費用、収益等の金額を基礎とし、連結法人相互間の取引高の相殺消去及び未実現損益の消去等の処理を行って作成する。

#### 第~~104~~106 連結法人相互間の取引高の相殺消去

連結法人相互間における役務の提供その他の取引に係る項目は、相殺消去しなければならない。

#### 第~~105~~107 未実現損益の消去

- 1 連結法人相互間の取引によって取得したたな卸資産、固定資産その他の資産に含まれる未実現利益は、その全額を消去しなければならない。
- 2 未実現損益の金額に重要性が乏しい場合には、これを消去しないことができる。
- 3 売手側の特定関連会社に少数株主が存在する場合には、未実現損益は国立大学法人等と少数株主の持分比率に応じて、国立大学法人等の持分と少数株主持分に配分するものとする。

#### 第~~106~~108 表示区分

- 1 連結損益計算書は、経常損益計算及び純損益計算の区分を設けなければならない。経常損益計算の区分は、連結法人の業務活動から生じた費用及び収益等を記載して経常損益を表示するものとする。

純損益計算の区分は、経常損益計算の結果を受けて、臨時利益及び臨時損失を記載して税金等調整前当期純利益を表示し、これに法人税、住民税及び事業税、法人税等調整額及び少数株主持分損益を加減して当期純損益を表示するものとする。

純損益計算の結果を受けて、目的積立金取崩額等を表示し、当期総利益を表示するものとする。

- 2 業務活動から生じた費用及び収益、臨時利益及び臨時損失は、一定の基準に従い、その性質を示す適切な名称を付した科目に明瞭に分類して記載しなければならない。

#### 第4節 連結キャッシュ・フロー計算書の作成基準

##### 第~~107~~109 連結キャッシュ・フロー計算書作成の基本原則

連結キャッシュ・フロー計算書は、国立大学法人等及び特定関連会社の個別キャッシュ・フロー計算書を基礎として、連結法人相互間のキャッシュ・フローの相殺消去の処理を行って作成する。

##### 第~~108~~110 表示区分及び表示方法

- 1 連結キャッシュ・フロー計算書の資金の範囲、表示区分及び表示方法については、「第22 キャッシュ・フロー計算書の資金」及び「第7章 キャッシュ・フロー計算書」に準じるものとする。
- 2 なお、連結範囲の変動を伴う特定関連会社株式の取得又は売却に係るキャッシュ・フローは、「投資活動によるキャッシュ・フロー」の区分に独立の項目として記載する。  
この場合、新たに特定関連会社となった会社の資金の額は、株式の取得による支出額から控除し、特定関連会社でなくなった会社の資金の額は株式の売却による収入額から控除して記載するものとする。

#### 第5節 連結剰余金計算書の作成基準

##### 第~~109~~111 連結剰余金計算書作成の基本原則

- 1 連結貸借対照表に示される連結剰余金については、その増減を示す連結剰余金計算書を作成する。
- 2 連結剰余金の増減は、国立大学法人等及び特定関連会社の損益計算書及び利益処分に係る金額を基礎とし、連結法人相互間の配当に係る取引を消去して計算する。
- 3 国立大学法人等~~及び特定関連会社~~の利益処分については、連結会計期間において確定した利益処分を基礎として連結決算を行う方法による。

##### 第~~110~~112 表示方法

- ~~1~~ 連結剰余金計算書は、連結剰余金期首残高、連結剰余金増加高、連結剰余金減少高及び当期総利益を示して、連結剰余金期末残高を表示しなければならない。
- ~~2~~ ~~連結剰余金減少高は、国庫納付及び役員賞与に区分して記載するものとする。~~

#### 第6節 関連公益法人等の取扱い

##### 第~~111~~113 関連公益法人等の情報開示

関連公益法人等については、国立大学法人等との出えん、人事、資金、技術、取引等の関係を「第7節 連結財務諸表の附属明細書、連結セグメント情報及び注記」に定めるところにより開示するものとする。（注68）

<注68> 関連公益法人等について

国立大学法人等と関連公益法人等との間には資本関係が存在しないが、国立大学法人等を通じて公的な資金が供給されている場合も多いことから、公的な会計主体である国立大学法人等は関連公益法人等との関係を開示し説明する責任を有している。

#### 第~~112~~114 関連公益法人等の範囲

- 1 関連公益法人等とは、国立大学法人等が出えん、人事、資金、技術、取引等の関係を通じて、財務及び事業運営の方針決定に対して重要な影響を与えることができるか又は国立大学法人等との取引を通じて公的な資金が供給されており、国立大学法人等の財務情報として、重要な関係を有する当該公益法人等をいう。（注69）
- 2 次の場合には、公益法人等の財務及び事業運営の方針決定に重要な影響を与えることができないことが明らかに示されない限り、当該公益法人等は関連公益法人等に該当するものとする。
  - (1) 理事等のうち、国立大学法人等の役員又は教職員経験者の占める割合が3分の1以上である公益法人等
  - (2) 事業収入に占める国立大学法人等との取引に係る額が3分の1以上である公益法人等
  - (3) 基本財産の5分の1以上を国立大学法人等が出えんしている財団法人
  - (4) 会費、寄附等の負担額の5分の1以上を国立大学法人等が負担している公益法人等
- 3 関連公益法人等の特定関連会社又は関連会社である会社は関連公益法人等とみなすものとする。
- 4 ~~次に掲げる場合は、関連公益法人等に該当しないものとすることができる。~~
  - ~~(1) 国立大学法人等の役員及び教職員の福利厚生を目的として設立されている公益法人等であって、2(2)に該当しない場合~~
  - ~~(2) 国立大学法人等が交付する助成金等の収入が事業収入の3分の1を占めることにより、2(2)が該当することとなるが、2(1)、(3)及び(4)に該当しない公益法人等であって、当該助成金等が、国立大学法人等の審査に付された上で、継続的、恒常的でない形態で交付される場合は、関連公益法人等に該当しないものとすることができる。~~

#### <注69> 関連公益法人等について

公益法人等とは、財団法人、社団法人のほか、社会福祉法人、特定非営利活動法人、技術研究組合等の法人も含まれる。

#### 第7節 連結財務諸表の附属明細書、連結セグメント情報及び注記

##### 第~~113~~115 連結財務諸表の附属明細書

国立大学法人等は、連結貸借対照表及び連結損益計算書等の内容を補足するため、附属明細書を作成しなければならない。なお、附属明細書は、「第75 附属明細書」に準じるほか、次の事項を明らかにしなければならない。

- (1) 特定関連会社、関連会社及び関連公益法人等の概要
  - ア 名称、業務の概要、国立大学法人等との関係及び役員の氏名（国立大学法人等（国立大学法人等設立に際し、権利義務を承継した国立大学等を含む。以下同じ。）の役

員又は教職員経験者については、国立大学法人等での最終職名を含む。）

イ 特定関連会社、関連会社及び関連公益法人等と国立大学法人等の取引の関連図

(2) 特定関連会社、関連会社及び関連公益法人等の財務状況

ア 特定関連会社及び関連会社の当該事業年度の資産、負債、資本金及び剰余金の額、並びに営業収入売上高、~~経常損益、当期損益及び当期末処分利益又は当期損失及び当期純損益~~の額

イ 関連公益法人等の当該事業年度の貸借対照表に計上されている資産、負債及び正味財産の額、正味財産増減計算書に計上されている当期正味財産増減額、正味財産期首残高及び正味財産期末残高（一般正味財産増減の部、指定正味財産増減の部に区分したうへ、各々収益と費用に区分し、収益には内訳で受取補助金等（国、国立大学法人等、特殊法人及び地方公共団体の補助金等）とその他の収益の金額を記載する。）並びに収支計算書に計上されている当期収入合計額、当期支出合計額及び当期収支差額

(3) 特定関連会社及び関連会社株式並びに関連公益法人等の基本財産等の状況

ア 国立大学法人等が保有する特定関連会社及び関連会社の株式について、所有株式数、取得価額及び貸借対照表計上額（前事業年度末からの増加額及び減少額を含む。）

イ 関連公益法人等の基本財産に対する出えん、拠出、寄附等の明細並びに関連公益法人の運営費、事業費等に充てるため当該事業年度において負担した会費、負担金等の明細

(4) 特定関連会社、関連会社及び関連公益法人等との取引の状況

ア 特定関連会社、関連会社及び関連公益法人等に対する債権債務の明細

イ 国立大学法人等が行っている関連会社及び関連公益法人等に対する債務保証の明細

ウ 特定関連会社及び関連会社の総売上高並びに関連公益法人等の事業収入の金額とこれらのうち国立大学法人等の発注等に係る金額及びその割合（内訳で、競争契約、企画競争・公募及び競争性のない随意契約の金額及び割合を記載する。ただし、内訳には、予定価格が国の基準（予算決算及び会計令第99条に定める基準）を超えないものは含めない。）

#### 第~~114~~116 連結セグメント情報の開示

- 1 連結法人における開示すべきセグメント情報は、当該連結法人が異なる事業を運営している場合には、その事業内容等に応じた適切な区分に基づくセグメント情報とする。
- 2 開示すべき情報は、連結法人の事業収益、事業損益及び当該セグメントに属する資産総額とする。（注70）

#### <注70> 連結セグメント情報の開示について

- 1 ~~連結法人においても、その業務の内容が多岐にわたる場合、説明責任の観点から、その業務ごとのセグメントに係る財務情報を開示する必要がある。~~国立大学法人等は、業績評価のための情報提供等による国民その他の利害関係者に対する説明責任を果たす観点から、その業務の内容が多岐にわたる場合、区分及び開示内容について企業会計で求められるよりも詳細なセグメントに係る財務情報を開示することが求められる。

- 2 ~~またこのため~~、開示すべき情報についても、~~国民その他の利害関係者等に対する説明責任を果たすため~~、連結法人の主要な資産項目、主要な事業費用及び主要な事業収益（国又は地方公共団体による財源措置等を含む。）の内訳等を積極的に開示する必要がある。
- 3 セグメントの区分については、~~一律かつ統一的に設定することは逆にその意味を失わせることにもなりかねないため~~、国立大学法人等の個別財務諸表におけるセグメント情報を基礎とし、関係法人の業務内容を勘案して、運営費交付金や補助金等に基づく収益以外の収益の性質や複数の業務を行っている連結法人の業務区分を参考にしつつ、個々に定めていくこととする。

#### 第~~1-1-5~~ 1 1 7 連結財務諸表の注記

連結財務諸表には、次の事項を注記しなければならない。

##### (1) 連結の範囲等

連結の範囲に含めた特定関連会社、関連会社に関する事項その他連結の方針に関する重要事項及びこれらに重要な変更があったときは、その旨及び変更の理由

##### (2) 決算日の差異

特定関連会社の決算日が連結決算日と異なるときは、当該決算日及び連結のため当該特定関連会社について特に行った決算手続の概要

##### (3) 会計処理の原則及び手続等

ア 重要な資産の評価基準及び減価償却の方法並びにこれらについて変更があったときは、その旨、変更の理由及び当該変更が連結財務諸表に与えている影響の内容

イ 特定関連会社の採用する会計処理の原則及び手続で国立大学法人等及び特定関連会社との間で特に異なるものがあるときは、その概要

ウ 特定関連会社の資産及び負債の評価方法

##### (4) その他の重要な事項

関係法人集団の財政状態及び運営状況を判断するために重要なその他の事項

「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準」及び  
「固定資産の減損に係る国立大学法人会計基準注解」

平成17年12月22日設定

第1 本基準の目的及び減損の定義

- 1 本基準及び注解は、貸借対照表に計上される固定資産の過大な帳簿価額を適正な金額まで減額すること及び国立大学法人等の業務運営状況を明らかにすることを目的とする。
- 2 固定資産の減損とは、固定資産に現在期待されるサービス提供能力が当該資産の取得時に想定されたサービス提供能力に比べ著しく減少し将来にわたりその回復が見込めない状態又は固定資産の将来の経済的便益が著しく減少した状態をいう。

第2 対象資産

本基準は、国立大学法人会計基準において減損処理に関する定めがある固定資産以外の固定資産に適用する。なお、重要性の乏しいものについては、本基準を適用しないことができる。(注1) (注2)

<注1>重要性の乏しい固定資産について

本基準を適用しないことができる固定資産に係る重要性の判断については、固定資産の金額的側面及び質的側面を勘案する必要がある。国立大学法人等の業務運営における主要な固定資産については、重要性が乏しいものとしてはならない。

<注2>国立大学法人会計基準において減損処理に関する定めがある固定資産について

国立大学法人会計基準において減損処理に関する定めがある固定資産とは、次に掲げるものをいう。

- (1) 投資有価証券(関係会社株式又は関係会社有価証券を除く。)
- (2) 関係会社株式
- (3) その他の関係会社有価証券
- (4) 長期貸付金(関係法人長期貸付金を除く。)
- (5) 関係法人長期貸付金
- (6) 破産債権、再生債権、更生債権その他これらに準ずる債権
- (7) 長期前払費用(債券発行差金を除く。)
- ~~(8) 債券発行差金~~
- ~~(9)~~ (8) 未収財源措置予定額

第3 減損の兆候

- 1 固定資産に減損が生じている可能性を示す事象(以下「減損の兆候」という。)が

ある場合には、当該資産について、減損を認識するかどうかの判定を行わなければならない。

2 減損の兆候とは、次に掲げる事象をいう。

- (1) 固定資産が使用されている業務の実績が、中期計画等の想定に照らし、著しく低下しているか、あるいは、低下する見込みであること。
- (2) 固定資産が使用されている範囲又は方法について、当該資産の使用可能性を著しく低下させる変化が生じたか、あるいは、生ずる見込みであること。（注3）
- (3) 固定資産が使用されている業務に関連して、業務運営の環境が著しく悪化したか、あるいは、悪化する見込みであること。
- (4) 固定資産の市場価格が著しく下落したこと。（注4）
- (5) 国立大学法人等自らが、固定資産の全部又は一部につき、使用しないという決定を行ったこと。（注5）

3 複数の固定資産が一体となってそのサービスを提供するものと認められる場合には、減損の兆候の有無について、これらの資産を一体として判定することができる。

<注3> 当該資産の使用可能性を著しく低下させる変化について

当該資産の使用可能性の著しい低下については、当該資産の取得時に想定した使用可能性を基準として判断する。なお、当該資産が政府からの現物出資又は承継により取得されたものである場合には、現物出資時又は承継時に想定した使用可能性を基準として判断する。

<注4> 市場価格が著しく下落したことについて

固定資産の市場価格について、帳簿価額からの下落割合が50%未満であるときは、著しく下落していないものとすることができる。

<注5> 使用しないという決定について

使用しないという決定には、固定資産を全く使用しないという決定のみならず、固定資産の取得時に想定した使用目的に従って使用しないという決定、すなわち、用途変更の決定も含む。なお、固定資産が政府からの現物出資又は承継により取得されたものである場合には、現物出資時又は承継時に想定した使用目的を基準に判断する。

#### 第4 減損の認識

1 次に掲げる場合に該当するときは、減損を認識しなければならない。

- (1) 別添「第3 減損の兆候」2(1)から(3)までに該当する場合であって、当該資産の全部又は一部の使用が想定されていないとき。
- (2) 別添「第3 減損の兆候」2(4)に該当する場合であって、当該資産の市場価格の回復の見込みがあると認められないとき。（注6）
- (3) 別添「第3 減損の兆候」2(5)に該当する場合であって、使用しないという決定が当該決定を行った日の属する事業年度内における一定の日以後使用しないという決



定であるとき。(注7)

2 1(1)において、当該資産の全部又は一部の使用が想定されていないときとは、次に掲げる要件を満たしていない場合をいう。

- (1) 当該資産の全部又は一部について、将来の使用の見込みが客観的に存在すること。(注8)
- (2) 当該資産がその使用目的に従った機能を現に有していること。

<注6>市場価格の回復可能性に関する判断基準について

市場価格の回復可能性については、経済全体の状況や固定資産の性質に照らし、相当の期間内に固定資産の市場価格が帳簿価額の相当程度まで回復する可能性があるかどうかを判断することとする。

<注7>固定資産について、翌事業年度以降の特定の日以後使用しないという決定を行った場合について

固定資産について、翌事業年度以降の特定の日以後使用しないという決定を行った場合には、使用しなくなる日において減損を認識することとし、その決定が将来の財務諸表に重要な影響を及ぼすと認められる場合には、それまでの間、当該資産の概要等について注記しなければならない。

<注8>固定資産の全部又は一部について、将来の使用の見込みが客観的に存在することについて

- 1 固定資産の全部又は一部について、将来の使用の見込みが客観的に存在することとは、例えば、保守管理が経常的に行われており、かつ、国立大学法人等の年度計画等においても将来の使用稼動が確実に見込まれている場合をいう。
- 2 固定資産の全部又は一部の使用が想定されるか否かの判断は、すべて実態によって行わなければならない。

## 第5 減損額の測定

減損が認識された固定資産について、帳簿価額が回収可能サービス価額を上回るときは、帳簿価額を回収可能サービス価額まで減額しなければならない。(注9)

<注9>回収可能サービス価額について

- 1 回収可能サービス価額とは、当該資産の正味売却価額と使用価値相当額のいずれか高い額をいう。
- 2 正味売却価額とは、固定資産の時価から処分費用見込額を控除して算定される額をいう。
- 3 時価とは、公正な評価額をいう。通常、それは観察可能な市場価格をいう。
- 4 使用価値相当額とは、減価償却後再調達価額をいう。ただし、減価償却後再調達価額を算出することが困難である場合には、当該資産の帳簿価額に、当該資産につき使

用が想定されていない部分（使用しないという決定を行った部分を含む。以下同じ。）以外の部分の割合を乗じて算出した価額を用いることができる。

- 5 減価償却後再調達価額とは、固定資産の全部又は一部につき使用が想定されていない部分以外の部分が有するサービス提供能力と同じサービス提供能力を有する資産を新たに取得した場合において見込まれる取得価額から、減価償却累計額（当該資産を減損が認識された資産の使用期間と同じ期間使用した場合に計上される額をいう。）を控除した価額をいう。

## 第6 減損額の会計処理

固定資産の帳簿価額と回収可能サービス価額との差額（以下「減損額」という。）については、次のように処理するものとする。

- (1) 減損が、国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行わなかったことにより生じたものであるときは、当該減損額を減損損失の科目により当期の臨時損失として計上する。（注10）
- (2) 減損が、国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行ったにもかかわらず生じたものであるときは、当該減損額は損益計算書上の費用には計上せず、損益外減損損失累計額の科目により資本剰余金の控除項目として計上する。

### <注10> 中期計画等で想定した業務運営を行わなかったことについて

中期計画等で想定した業務運営を行わなかったことについては、固定資産に減損が生じた原因が、国立大学法人等が中期計画等の想定範囲内の業務運営を行わなかったこと又は中期計画等の想定範囲外の業務運営を行ったことにより生じたものであることが明確である場合とし、それ以外の場合は、中期計画等で想定した業務運営が行われたものとする。

中期計画等で想定した業務運営を行わなかったこと及び想定範囲外の業務運営を行なったこととは、例えば、中期計画等で定めた施設の利用促進方策を講じなかったこと等経営上必要な措置を採らなかったため、中期計画等で定めた年間利用予定者数を確保できなかった場合などが該当する。

このため、中期計画においては、中期目標で掲げられた目標を更に具体化するなど、できる限り定量的な計画を設定する必要があることに留意する。

## 第7 資産見返負債を計上している固定資産に係る減損額の会計処理

「第77 運営費交付金等の会計処理」、「第79 補助金等の会計処理」及び「第81 寄附金の会計処理」の規定により資産見返負債を計上している固定資産に係る減損額については、次のように処理するものとする。

- (1) 減損が、国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行わなかったことにより生じたものであるときは、当該減損額を減損損失の科目により当期の臨時損失として計上するとともに、資産見返負債を積立金に振り替える。
- (2) 減損が、国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行ったにもかかわらず

ず生じたものであるときは、当該減損額は損益計算書上の費用には計上せず、資産見返負債を減額する。

## 第8 国立大学法人等業務実施コスト

国立大学法人等が中期計画等で想定した業務運営を行ったにもかかわらず生じた減損額は、国立大学法人等業務実施コストに属するものとし、国立大学法人等業務実施コスト計算書において、損益外減損損失相当額の科目により、損益外減価償却相当額の次に区分して表示しなければならない。

## 第9 貸借対照表における表示

~~1 減損が認識された非償却資産及び償却資産である無形固定資産の貸借対照表における表示は、減損処理前の帳簿価額から減損額を直接控除し、控除後の金額をその後の帳簿価額とする形式で行うものとする。~~

~~2 減損が認識された償却資産（無形固定資産を除く。）の貸借対照表における表示は、当該資産に対する減損損失累計額を、取得原価から間接控除する形式で行うものとする。（注11）~~

1 減損が認識された固定資産（無形固定資産を除く）の貸借対照表における表示は、当該資産に対する減損損失累計額を、取得原価から間接控除する形式で行うものとする。（注11）

2 減損が認識された無形固定資産の貸借対照表における表示は、減損処理前の帳簿価額から減損額を直接控除し、控除後の金額をその後の帳簿価額とする形式で行うものとする。

### <注11>減損損失累計額について

減損損失累計額には、損益計算書に計上された減損損失の累計額だけでなく、国立大学法人等業務実施コスト計算書に計上された損益外減損損失相当額の累計額が含まれる。

## 第10 減損処理後の会計処理

- 1 減損処理を行った固定資産については、減損後の帳簿価額に基づき減価償却を行わなければならない。
- 2 減損の戻入は、行ってはならない。

## 第11 注記

- 1 減損を認識した場合には、次に掲げる事項について注記するものとする。
  - (1) 減損を認識した固定資産の用途、種類、場所、帳簿価額等の概要
  - (2) 減損の認識に至った経緯
  - (3) 減損額のうち損益計算書に計上した金額と計上していない金額の主要な固定資産ごとの内訳

- (4) 減損の兆候の有無について、別添「第3 減損の兆候」3に基づき、複数の固定資産を一体として判定した場合には、当該資産の概要及び当該資産が一体としてそのサービスを提供するものと認めた理由
  - (5) 回収可能サービス価額が、
    - ア 正味売却価額である場合には、その旨及び算定方法の概要
    - イ 使用価値相当額である場合には、その旨、採用した理由及び算定方法の概要
- 2 別添「第3 減損の兆候」2(1)から(4)までに掲げる減損の兆候が認められた場合（減損を認識した場合を除く。）には、次に掲げる事項について注記するものとする。
- (1) 減損の兆候が認められた固定資産の用途、種類、場所、帳簿価額等の概要
  - (2) 認められた減損の兆候の概要
  - (3) 減損の兆候の有無について、別添「第3 減損の兆候」3に基づき、複数の固定資産を一体として判定した場合には、当該資産の概要及び当該資産が一体としてそのサービスを提供するものと認めた理由
  - (4) 別添「第4 減損の認識」2に掲げる要件を満たしている根拠又は固定資産の市場価格の回復の見込みがあると認められる根拠
- 3 別添「第3 減損の兆候」2(5)に規定する使用しないという決定を行った場合であつて、その決定が翌事業年度以降の特定の日以後使用しないという決定である場合には、次に掲げる事項について注記するものとする。
- (1) 使用しないという決定を行った固定資産の用途、種類、場所等の概要
  - (2) 使用しなくなる日
  - (3) 使用しないという決定を行った経緯及び理由
  - (4) 将来の使用しなくなる日における帳簿価額、回収可能サービス価額及び減損額の見込額